
ライブラリアン ~図書館の森~

ともみつ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ライブラリアン ～図書館の森～

【Nコード】

N1908E

【作者名】

ともみつ

【あらすじ】

本には妖精が宿る。いつかの世迷い事だと思っていたんだけど、これは……何？え？これが妖精？いや、ヴァーチャルピクチャーじゃないんですか？え？これからここで、働くんですかっ！？聞いていないですよ、そんなこと。あ、いえ。本は好きですけど……。え？いや、本好きとそれとはまた別問題では……。あっ、ちょっと、待ってくださいっ！僕、明日から業務開始なんですけど……。

派遣司書

本には妖精が宿るとされている。悪戯な妖精、優しい妖精、面白い妖精、静かな妖精、哀しげな妖精、恐ろしい妖精。その妖精たちは本の数だけ存在する。

そして、司書とは、妖精とのコンタクトを取ることのできる唯一の職業だと、そんな嘘を僕は本の読みすぎの妄想家の発言だとは思っていなかった。

「遠いな、今度は」

数日前に、僕の赴任先が決まった。大手派遣会社パルリアートに登録してから、司書館や図書館での図書や雑誌の収集、整理、保存図書の分別選定、貸し出し、注文図書などの情報サービスの提供など、ユニバーサリー時代に図書館学を履修して取得した司書資格のおかげで仕事には困らなかった。それでも、僕は最近少しだけライブラリー業務に対してやる気と言うのか、意欲が下がり始めた。別に嫌ってわけと言うわけじゃない。本に囲まれて静かな環境で仕事をするのは、心が落ち着き、穏やかでいられる。それでも僕は、欲が強いのだろうか。もっと資格だけじゃなく、もっと僕の中にある何かを発揮できる業務を求めている。

《アサルト・キッシュさんにご紹介する業務は、通称森の図書館、ウォルトライブラリーでの司書官業務補佐です。》

メールで紹介された、今のライブラリーでの契約満了に伴う次の業務紹介に、僕は特に考えるわけでもなく、受諾のメールを返送した。ライブラリーに通称がつくことは珍しくないし、恐らく自然に囲まれた中にあるライブラリーなのだろうと、パルリアート本社のあるミンティス州ラクリアのビル街での仕事よりは、もっと快適に仕事が出来るとは思っていた。それに司書官の補助業務となれば、今まで以上に楽だろう。

「にしても、アバラン州か」

今住んでいるのはラクリアの都会。ウォルトライブラリーのある住所がミンテイス州から州を四つもまたぐアバラン州。さすがに通勤と言うわけにはいかない距離に、仕方なく引越しをすることにした。派遣社員だから、少しは手当てが出るとはいえ、あまり贅沢な引越しは出来ない。大手ではなく、個人の引越し業者に依頼した。

「へえ、のどかなところなんだ」

そして今日、僕は住み慣れたラクリアを離れ、ラクリアのセントラル駅からウォルトのサイオン駅にレールラインで四時間かけてようやく辿り着いた。正直疲れはした。それでもその間は電子書籍エレクトロブックを読んでいたから意外と早くも感じた。通勤のスタンダーレールよりもやっぱりゆつたりと列車旅が出来るレールラインは読書には向いていた。

「こらあつ！ 待てっ！」

「待てって言いながら追いかけてくるなあつ！ そっちが止まれえっ！」

不意に行き交う人の中に、そんな叫びが聞こえた。ざわつきの中に僕もいた。

「ええいつ、やかましいっ！ 子供が大人をからかうんじゃないっ！」

「あたしの方があんたよりもずっと長生きしてるもんぐっ」

ワーキヤー騒がしい逃走劇。こちらへ駆けてくる女の子と、その後ろから追いかけてくる警備員。何か女の子が悪いことをしたのだろう。でも、ここまで騒ぎ立てなくても良いんじゃないのかな。同じように傍観してる人たちも、少し怪訝そうだ。

「こらあつ！ その本を返さんかっ！」

「うるさーいつ！ おまえらなんかに渡すか、ばーかばーかっ。本のことなんか考えてないくせにいだっ！」

イーっと女の子が振り返って警備員に舌を出してあっかんべーをしながら、人ごみをすり分けて僕の目の前を通り過ぎた。そして、すぐその後を通行人に退けと言いながら警備員も駆けていった。

「何だつたんだ？」

突然のことで事情が分からなかった。回りもみんな僕と同じ顔で二人が駆けていった町の方に目を向けていた。

「ん？ 落とし物？」

徐々に何事もなかったかのように構内が元に戻ると、僕も歩き出す。そして構内を出ようとした時、誰かの落とし物なのか書籍が落ちていたのに気づいた。

「春の植物？」

題名に書かれていた。中身は植物図鑑だった。小冊子の中にある写真と解説は、時代を感じさせるように作りが少し古いと思った。

「捨てられた、のか？」

誰かが捨てたのか、落としたのか、分からないけど拾ってしまった。

「コードがついてる？ 所蔵本か？」

ページを大雑把に捲ると、最後の方に書籍コードがあった。コードがある以上、この本はどこかのライブラリーかアカデミー内の図書室の所蔵本だろう。

「ウォルトライブラリー所蔵か。ちょうど良いか」

裏背面に記された所蔵所名に葉見覚えがあった。と言うよりも、ちょうど向かう途中の僕の次の仕事場だった。

「持っていくか」

誰かが貸し出し本として借りたのであれば問い合わせがあるだろうし、遺失物であれば返却すれば良い。ゴミとして処分されるのはあまりにももつたいたない。長年の癖のせい、僕はそのまま図鑑を手にしたままウォルトライブラリーに向かった。

ラクリアの都会とはまるで異なり、のどかな自然の生きる、緑の町だった。木造白壁の家には花が愛らしく咲き、空の青さが吸い込む息に爽快感を与えてくれた。

「木陰で読書とか最高だろうな」

人工物があるのに、その人工物特有の臭さが無い。木目と土の共演する優しい家の連なりと、野畑の実りと香りには実に読書日和の春があるのだと、僕は新居に向かいながら穏やかな時間をページを捲るようにゆっくりと見て、感じた。

あれって、何？

「まあ、こんなものか」

室内に既に運び込まれた荷物を必要なものだけを解包し、一通りの生活環境を整えた。派遣に登録してからの癖になった。業務に関して特に地域を拘っていないから、引越しになれた。おかげで何度目かの引越しなのに、開けてない梱包ケースがいくつもある。必要のないのに捨てられない。そのケースの中には全て本が詰まっている。電子書籍が業界の大半を占めてしまっている中で、減少を続ける司書の仕事。専ら僕の扱ってきたものは古書。僕はそれが好きだ。電子書籍の面白さと手軽さは理解してる。ラクリアのライブラリーに勤務している時は通勤で読んでた。でも、僕は好きなんだ。本のページを捲る感触と紙の擦れる音とその本を包み込んできて染み付いた匂いが。

「とりあえず、行ってみようかな」

本格的な業務開始は明日から。その前にウォルトライブラリーがどんなものか知っておきたい。そう思って僕は、今じゃ電子標識に見慣れたせいで珍しさのある木製案内標を見ながらウォルトライブラリーに向かった。

「ほんと、絵本の世界みたいな町だな」

どこかしこにも柔らかかい日差しが程よく照らしていて、静かな中にも蝶の羽ばたきや鳥のさえずり、木の擦れ、風の囁きがここまで穏やかで温かいものだったのかと、つい歩きながら目を閉じてしまった。

人の五感は一一つが類まれな能力を有している。目で見て、耳で聞いて、鼻で嗅いで、口で味わい、肌で感じる。現実世界でその全てを満たすのは容易すぎて、人は忘れてしまう。それを本は教えてくれるんだ。目で文章を追い、世界を大まかに構築し、耳でその世界の音を作り出し、鼻で世界の香りを吸い込み、口で登場するもの

を味わい、肌で本の世界を想像から感じる。人の感性はそれぞれ異なる。それが本の魅力の魔力になる。読者それぞれの世界が、出来るものが書籍の魅力だと思っっている。だからこそ、その書籍には妖精が宿る。人の創造した本の世界から、ついつつかり足を踏み出してこの世界へ落ちてきてしまった登場人物の一人が、そのまま本の妖精としてこの世界で生きている。そう言うことなら僕は認めてもいいかもしれないと思う。まあいくら本が好きでも、そんな妄想を抱いてしまっても、進み行く現代の技術を目の前にしてしまつと、ホログラムで見る立体書籍の前にそれは崩れる。少しだけ昔の技術のなかつた時代に憧憬を思ったりする。

「ここか」

ライブラリーだけ近代建築による完全書籍保護システムの下に成り立っているものかと思つた。

「景観保護法でもあるのかな。でも、良いな、こういうライブラリーも」

目の前にある看板にはウォルトライブラリーの名前。そして視線の先にあるものは、ここまで見てきた住居と差して変わらないほどのぼとした造り。見てるだけで、この町はほっこりする。

「これは良い仕事場かもしれない」

内装を見たわけじゃないけど、ここまで今までとは違う景観のライブラリーに少しだけ胸が高鳴つた。

「あの、すみません」

館内はやはり僕がこれまで勤務したライブラリーとは明らかに雰囲気違った。館内を飾るのは、本だけじゃなく洒落てるんだけど、落ち着いた雰囲気で見葉植物などが綺麗に飾られていた。

「明日からここで勤務するアサルト・キッシュなんですけど、挨拶にうかがわせてもらいたいんですが？」

「アサルト・キッシュさんですね？ 少々お待ち下さい」

カウンターにいた女性が話を通っていたようで納得した笑みを浮かべながらキーボードを叩いていく。この人も同僚になるのかと思

いながら、静かな館内に目を向けていた。

「アサルトさん、アサルトさんの担当箇所は精霊指定図書館です。ここを左に曲がった奥にある関係者扉よりお入り下さい」

「そうですね。ありがとうございます」

女性に言われ一礼しながらも、頭の中ではそんな部署を聞いたことがないから、考えていた。

「政令指定図書か？ 法令指定の図書ってことかな？」

政令指定図書は、大方都市部のライブラリーに保存してある一般には公開されない政経資料本を主に差す。と言うことは、僕が配属されたのはそういう書籍の管理業務なんだろうか。言われた通りに通路を通り、関係者以外立ち入り禁止の扉を潜り、古文書庫や事務室、映像保管庫、音声保管庫など様々な部屋を通り過ぎる。この辺りは知ってる名前ばかりだった。

「政令じゃなくて、精霊、だったのか？」

ますます意味が分からなくなった。言われた通りに進んだ最奥部の扉に精霊指定図書と書かれていた。そして、何より……。

「何だ、ここは？」

扉の前には乱雑に詰められた梱包ケースの山。他の扉の前は整然としているのに、ここだけはありえないくらいに汚くて、狭い。

「くっ、ちよっ、このっ」

今にも崩れそうで、人一人分がやっと通れる隙間を掻い潜るように扉に手をかけた。

「しっ、失礼、し、しますっ」

入り口を潜ろうとするだけなのに、どうしてか疲れた気がする。

「え……」

そして、その瞬間、僕は呆気に取られたと言うか、物語の世界に間違っただけ踏み落ちてしまったような、とにかく呆然と扉を潜った瞬間に固まってしまった。

「シオリーッ！ シオリーッ！ こらシオリッさっさと来いっ！」

「シオリちゃんなら、お出かけしちゃっていいよぉ〜」

「はあっ！？ あんのクソガキツ、まあた、処分図書盗りに行ったわけ？」

「そおみた〜い」

「ふざけんなつつーのっ！ こっちの仕事が優先だつて何回言えば分かんのよっ！」

「私に怒らないでよお〜」

扉を開けた瞬間、僕の耳に聞こえてくる一人の女性の怒声と、もう一人の女性の柔らかい声。それは別に驚きはしなかった。いや、驚いたかもしれないけど、ただ聞こえたただけだった。

「さ、桜？ と言うか、何、ここ？」

僕の目に飛び込んできたのは、どう見ても図書館じゃない。広い室内、いや、外なのか？ 目の前には階段状の段の上に一本の桜が淡紅を満開に開かせていた。その桜を取り囲むように緑の木々が生い茂り、その枝を利用して本が無数に収納されていた。

「あ、ありえない・・・」

それだけじゃない。よく見れば天井にはガラス天井になっている。つまりここは室内。そして、木の本棚だけじゃなくて、動物のような変な生き物が僕の目の前を歩いていたり、飛んでいる。虫でも動物でもない。何なんだ、ここは？

つんつん。

「ん・・・？」

くにゅ。

「んふふ〜。だあれえ〜？」

肩を叩かれて振り返ると、頬に何かが刺さった。目を少し下げると真白で細い、しなやかな指だった。

「あ、あの・・・？」

その指を辿っていくと桜と同じ色の柔らかかそうな長い髪を流す女性性があった。

「ここはあ、関係者のみの立ち入り制限区域ですよ〜？ 許可証はありますかあ〜？」

優しそうな笑顔。愛らしい服装と実に合う人形のような女性だった。

「あ、いや。えっと、僕は明日からここで働く……」

「働く？ ん？ あゝあゝ、えっとお、アサルト・キツシュ、君？」

「そ、そうです。今日は挨拶に来たんですけど……」
首を傾げる仕草もいちいち可愛いと思った。

「そおなんだ。一般人と思っちゃった」

にこりと笑う女性。可愛いんだけど、何かちょっとズレてる気がした。

「ラ〜ミ〜アちゃん。お手伝い君が来たよお〜」

そう言っつて、木々の本棚のどこかへ向かって女性が声を上げた。
なぜか僕の頬に指を刺したままで。

「はあっ？ 手伝いいい？ んなことよりもシオリはどこ行ったつてのよ？ 暇なら探してきなさいよねっ。こっちはそれどころじゃないつてのよっ！」

「だあかあらあ、私に怒らないでつてばあ」

今度はどこかからそう返ってくる。

「あの、えつと……」

何故か罪悪感がひしひしと僕に伝わってくる。

「ごめんね。ラミアちゃん、ちょっと書棚の管理妖精が出て行っちゃって気立つてるのぉ」

この人ののんびりとした口調とは違って、返ってくる声は実にはきはきしていて、この人が僕に話してくる間も、あゝもあつ、全然片付かないじゃないのよっ！ と、愚痴が次々に飛んでくる。

「あの、それよりもここ……」

見たこともない、見たことがあるとすればCGによるヴァイジョクッション幻影投影画くらいだ。どれもファンタジックな世界でしか見たことがない。そのファンタジックの世界でも見たことがないんだけど、ここにいる生き物は。

「私は、サミルシア・エルシエです。この精霊指定図書館の重要保護書の管理司書官です」

「いや、そうじゃなくて。あ、いや。僕はアサルト・キツシュです。この度は司書官補助業務に赴任させて頂きます」

「はい、私と、ラミアちゃんのお仕事のお手伝いをよろしくお願いしますね」

ほんわりするエルシエさんの口調。あれ？ 話が噛み合っていないよな？ 確か。

「えっと、そうじゃなくてですね……」

「ん？」

ふにふに。

「あの、その……」

ふにふにふにふに。

「……これは、なんですか？」

「気持ち良いよね、キツシュ君のほっぺた」

何だろう。よく分からないけど、エルシエさんはいきなり僕の頬をつついてくる。痛くはないんだけど、何か微妙。と言うか何故？

と疑問が湧く。おかげでこの室内にいる人間以外の生物の不思議さが不思議に思えない、当然のような気すら湧いてきた。

「なんかね、女の子みたい。あんまり運動とか外に出たりとかしないタイプ？」

のほほんとマイペースに僕の質問を流して、エルシエさんはあくまで自分の主義を換えようとしな。別にこういうタイプの人の付き合いは初めてじゃないから、良いんだけど、この行為の意味だけが分からない。

「ええ、まあ。運動はそれほど得意ではないので」

「だよねえ。私もね、運動音痴なの。ラミアちゃんは体育会系読書派歴史好き会のよく意味が分からないタイプなんだけどね」

「エルシエちゃん？ 陰口言ってる暇あんなら、さっさとシオリを探してこいっ！」

どこにいるのか姿は見えないけど、ラミアとエルシエさんが読んでいる人の怒声が響いて、すぐに無数の本と目の前をうろつく、奇妙生物たちの中に消えていく。

「ねえ？ 自分が中心じゃないとすぐ怒るの。あつ、一応ね、ラミアちゃんがラツシユ君の担当司書官だから、明日からの業務の補佐はラツシユ君がしてあげて。ラミアちゃん、本のこととは理解してるんだけど、たまに口だけで頭が追いついてないことがあるの。一人で大丈夫ってよく言うくせに、誰かがちゃんと見ててあげないと、すぐダメダメに……いたあつ！」

エルシエさんがふいに頭を抑えて振り返った。バサツと床に落ちたのは、本だった。五年前ほどに出てすぐに発売禁止になり、回収された書籍だった。今となっては禁書目録に登録された書籍の価値は一部で高騰してると言うのに、そんな範疇の本を平然とどこからラミアさんが投げてきた。

「なあにするのおく？ ラミアちゃんく」

「あんたはいちいち一言余計なのよっ！ 話してる暇があるならさつさと探してきなさいっての」

「んもお、ラミアちゃん、私は良いけど、本を粗末に扱うのはダメだよ」

ぷーっと頬を膨らませながら、涙目になりながらも、エルシエさんは本を拾う。

「カヅラ。悪いんだけど、これ、元に戻しておいてくれる？」

「あいあいあい」

「うわっ！ 喋ったっ!？」

エルシエさんが目の前をふよふよと飛んでいる鳥のような羽を頭から生やして飛んでいる、女の子のような、何かファンタジーの世界に出てくるような、不思議な生き物に禁止目録登録書を渡した。

「んく？ カヅラがどうかしたかな？」

「あ、あの、今のって……」

ふわふわと書籍を受け取った、カヅラと呼ばれていた、何かが本

を胸で課書けながら四方を取り囲む木の枝の本棚に飛んでいく。さつぱりこの現状と状況が分からない。

「カヅラのことかな？ カヅラは、咲くカヅラって七年前に禁書目録に登録された児童書の妖精だよ？」

「はい？ 妖精って？」

「ん、あれ」

あれ、とエルシェさんが指差す。そこには、先ほどから目の前を行ったり来たりする謎の生物たちがいた。人間のようなものもいれば、鳥や小動物、四足動物などのようなものもいる。でも、動物と呼ぶにはあまりにも見たことのない生物ばかりで、どこかの国の新種か珍種なんだろうかと僕の頭は混乱していた。

え？ あの……。

「キツシュ君」

「はい？」

「ここがどこだか説明受けて来た？」

「いいえ。パルリアートからはこちらで説明を受けるようにとあったのですが」

「そ〜なんだあ。うん。じゃあ、明日からだし、今からでも変わらないよね？ 時間ある？」

エルシェさんが僕に聞いておきながら、答えは唯一つしかないと言わんばかりにどこかへ歩き出す。

「こつちだよ、キツシュ君」

「あ、はい」

どうやら問答無用で話をしたいらしい。ついていくしかない。

「あ、この辺根っこが出てくるからコケないように……きゃっ！」

室内のはずなのに、床には一応室内だと主張するタイルがあるのに、それを突き破って、中央の巨木桜の根が生えていた。そして、僕の目の前でエルシェさんがコケた。僕に気をつけるように忠告しながら。

「うう〜、いったあ〜い」

「だ、大丈夫ですか？」

見事なこけっぷりだった。顔面からこけて、スカートがひらりと僕の目の前に広がった。思わず目を逸らしながらも、エルシェさんの前に行き、手を差し出す。

「うう、ごめんねえ。いつもはこうじゃないんだよ？ 私、結構しっかりしてるんだよ？ ほら、言うよね？ 何もないとこでコケると、いざと言うときに転ばないって」

何も聞いてないのに、エルシェさんが僕に恥ずかしそうに弁明してくる。

「木の根でコケたくせによく言うわねえ。そう言うこといちいちするから腹黒いのよ、あんた」

「え？」

「んもお。私、ちょっとドジなだけだもん。腹黒くなんかないよ」

「ドジな奴は自分をドジとか言わないの。ドジだつてことに無自覚なんだから。自覚してる時点でドジじゃなくて、ドジ真似としか言わないのよ」

いつの間にか、もう一人の女性がいた。声からしてラミアさんだろう。両手で数十冊の書物を抱えていた。

「で、あんたがあたしの補佐？」

「は、はい。アサルト・キッシュです。明日からよろしく願います」

「ん。じゃあよろしく」

これお願いね。そうラミアさんが僕に抱えていた書物を渡してくる。ずしつと来る重みに腕が少しだけ予想と違った重さに下に沈んだ。

「え？ あ、あの、ちょっと……？」

「どうせ明日つつつても、あと数十時間でしょ？ なら変わらない変わらない。どうせ明日にもやる仕事なんだから、今やれば明日が楽になる。いいこと尽くしでしょ？ 明日片付く仕事は今日やって片付くのよ。だったらさっさとやっちゃう方が明日が楽になるでしょ？ ほら、働く働く。仕事はまだまだ溜まってるんだから」

僕の業務は明日からと定められているにも関わらず、ラミアさんはそんなことは無関係だと僕に書物を押し付けてくる。エルシエさんはほんわりとした雰囲気なのに、ラミアさんはサラサラしてる髪を後ろ括りですくすく纏め上げ、小さな眼鏡と動きやすそうな格好で、すっかりした人っぽいけど、僕に任せるだけ任せると、次の仕事だと愚痴を言いながら近くにいた、アリのクイのような変な動物を引き連れてまた木の枝を掻い潜りながらどこかへと姿を消した。そんな

躊躇いもなく変生物と仕事をしているのを見てみると、理解出来ない不可解な気持ちになる。誰か僕にこの状況の詳細を教えて欲しいよ。

「あゝ、あの、エルシエさん」

困った。この書物はどうすれば良いんだ？ エルシエさんに意見を仰ごう。

「私、ちょっとだけドジなんだよ？ 一生懸命やってるんだけど、うまくいかないことが多いだけだからね？」

「いえ、そうじゃなくてですね……」

僕としては何も知らない以上、今さっきのエルシエさんのコкетツぷりは紛れもないドジだと直感があっただけで、実際にそうだろうと違おうと、正直どちらでも良い。僕にとって今重要なのは、ただ一つ。

「これは、どうすれば？」

僕の両手にある書物。お願いね、と言われてもどうすれば良いのか分からない。

「え？ あ、ああ。それだね。うん。あのね、それはね、えっとね、えーとお……」

エルシエさんが少しだけ慌てながら、僕の言葉をやっとな聞いてくれたみたいで、エルシエさんの視線が僕の顔から胸に落ちる。

「エルシエ様。そいつあ第三百十三書棚の四段から二十二段、四百五十書棚の五段でさあ」

僕の手元にあるもんを見て、エルシエさんが唇に人差し指を当てて首を傾げる。その一つ一つの行動には可愛げがある。女性としては魅力的だと思うけど、不意に桜のある中央の壇から降りてきた、鷲のような赤い鳥が、喋った。僕の目はただありえないものを見たという驚きに瞬きが増えただけだった。

「そうだったけえ？ ジョンケールが言うならそうかもね」

「そうですさあ。あっしや上層書棚のこたあ毎日見てまさあ。どんなんがあるかなんて、一目でさあ」

何だろう。この不思議空間は。ここは仮想世界なのか？ 僕の目の前でエルシエさんと鳥が会話をしている。

「だって、キツシユ君。その本はまだ解妖してない書物だから、扱いは気をつけてね」

「え？ 気をつけるって、どうするんですか？」

僕は何となくだけど、感づいた。この人たちは我が儘だと。そして、人の話を聞かず、自分の話を中心に物事を考えるであろうマイペースな人だと。読書を嗜む人にはいくつか傾向がある。人に意見するのが苦手で、大人しく書物の世界で時間を過ごす人。時にはその蓄えた知識を疲労することで脚光を浴びつつも、それが羞恥に感じてしまう人もいる。そしてその対極もいる。本を教養としつつも、その世界をもう一つの人生観と捉え、知識としてだけでなく、世界観として日常生活にその書物の世界を堂々と取り込む。時に傍から蔑まれ、嘲笑を受けようと、そうする人間こそそうなのだ。自己主張の強い人。大まかに分類すると、そう言う人間が多いと僕は司書としてライブラリー勤務で見た。そして、エルシエさんもラミアさんも恐らく後者。その中でも特に書物の影響を大きく受ける人のような気がした。

「それをね、あそこ。分かるかな？」

エルシエさんが僕の傍に来て、僕の目線に合わせるように桜の木を指差すように背伸びをした。すぐ隣に背伸びをするエルシエさんからは、花のような柔らかい匂いがして、思わず顔を少し反らせながら指の指す場所を見上げた。

「えっと、どこですか？」

ぶっっちゃけ、エルシエさんが指差す場所は、はるか上層部まで本がぎっしりと見えた。こここの天井って、こんなに高かったっけ？

そう思わずにはいられないくらいに桜の花びらがひらひらと舞うよりも高い場所にある本棚と、そこに収納された本の数には圧倒されるばかりだ。その上空を飛んでいる生物も摩訶不思議すぎるんだけれど。

「ん〜、分からないかなあ。あそこなんだけど」

困った顔をされても、僕が困る。

「エルシエ様。あつしが行きやしょう。キツシユ様とやら、あつしが止まる枝棚にそいつらを収めてやって下せえ」

「え？ あ、はい。分かりました」

ジョンケールとか呼ばれていた赤い鳥が僕よりも大きな翼を広げて少し重たそうに桜の枝をすり抜けて上空に羽ばたいていった。

「あの、エルシエさん、あの鳥は一体……？」

「ん〜？ ジョンケール？ あれはね、三十五年前に第一版が発行されたイルマード・トリステイアって十年前に死んじゃった小説家のレッドウォーレックって物語の妖精だよ」

だよ、と言われても、僕にはさっぱりなだけれど。残念ながらその小説は読んだことがない。

「キツシユ君。キツシユ君は本、好き？」

唐突な話題の転換。やっぱりエルシエさんは後者だ。

「え？ あ、はい。好きですよ？」

「うん。だよな。そうだと思ってたよ」

そうですね。それがどうかしたんですか？ 僕の頭には状況整理が一向に追いつかないこの現状に混乱と言うか、麻痺しているのかもしれない。エルシエさんの問いかけに焦らされている感じずにはいられない。この実にまったりとした雰囲気には僕は吞まれかけているのだろうか？

「えっと、今の問いかけはどういうことですか？」

「本にはね、一冊一冊に妖精が宿るんだよ」

実にファンタジーな発言が飛び出した。この人は一体どんな思考をしているのか頭の中を覗いてみたくなってきた。こんな発言を堂々とする人を僕は見たことがない。だからだろう。エルシエさんの印象が少しずつ変な人だと認識しようと思いが記憶していく。

「じゃ、じゃあ、あのジョンケールと言うのが、レッドウォーレックの妖精、と言うことですか？」

それでも僕は聞いてみた。そんなはずがないと思う気持ちが強いながらも、この人が僕に嘘をついているようには思えない。何も言わない代わりに、エルシェさんは僕にっこりと微笑んだ。それが答えと言った。そして僕はそれでもやっぱり信じられなくて、ジョンケールが飛んでいった天井を見上げた。

ライブラリアン、ねえ。

「キツシユ様。あつしが見えやすい？　ここにその書籍類を仕舞うんでさあ」

少し大きな声が遠い場所から聞こえた。ジョンケールの声に僕の近くにいた変な生き物たちも一瞬空を見上げたけど、すぐに仕事なのか本を持って行ったり、雑談のような話し声が聞こえて、すぐに視線が元に戻った。

「え？　何、あんな場所なんですか？」

「うん。ちょっと高いけど、いつものことだよ」

そうなんだ。いつもあんな場所に書物を保管しているのか。ここはどんな仕事場だ？　司書にそんな建設現場作業員のように安全性を保障された器具もなしに行けと言うのか、ここは。

「一人で大丈夫？」

「いえ、無理です」

高所恐怖症と言うわけではないけれど、さすがに高すぎる。さっきまでは随分と大きな鳥だと思っていたジョンケールの姿が随分と小鳥のように小さくなっている。

「はつきり言うね？　でもだいじょーぶ。落ちても桜が受け止めてくれるよ？」

エルシエさんがジョンケールの止まっている枝棚ではなく、見上げた視界いっぱい広がる桜の巨木を僕に見ると視線で言ってくる。「いえ、そう言うことじゃないと思いますよ？」

どう考えても桜の枝が受け止めてくれる高さじゃない。桜も物凄く大きい。室内空間の半分は占めているくらいのは圧感すらもある。それでも、ジョンケールのいるのは遥か高み。落ちれば桜の枝を折って地面に落下が目に見えている。

「キツシユ君、初めから諦めてると、何も始まらないんだよ？　私ね、やって諦めるよりも諦めてやらない方が好きじゃないな」

エルシエさんが僕を見る。澄んだ瞳で僕を見上げる。いやいや、その目は反則ではないでしょうか？ そんな愛らしい、今にも抱きしめたくなるように見られると、僕に罪悪感と言うものが湧いてくるんですけど。

「可能範囲であるなら、僕も賛意します。ですけど、ものには限度と言うものがあってですね……」

「ここはね、大丈夫だよ。だって、妖精さんがいるんだもん」

だもんとか言われても。僕の仕事は明日からであって、今日から働いても規定遵守事項に則っての給与の支払いがあるわけで、僕は慈善事業に来たわけじゃないし、そんなに人が良いわけでもないんだけれど。

「あの、一つお伺いしても良いですか？」

「ん〜？」

エルシエさんが首を傾げて僕を見る。何も言わない以上、聞いてくれるのだろう。

「この空間にいる動物のようなものは、一体何なんでしょうか？」

ふよふよと取りとは明らかに違うのに空間に浮いているもの。鳥のように自由に空を飛んでいるもの。地を這っているもの。人間と同じように二足歩行しているもの。何かよく分からない巨大なものに小さなもの。不思議と恐怖感と言うものは感じない。どれもこれも妙に穏やかと言うか、ゆったりとしているように見えるんだ。

「妖精」

エルシエさんが実に簡潔に教えてくれる。うん、僕もそれは知っていますよ？ だからそれが何なのかをお聞きしたのですけど。間違っではないんだけれど、どこか話が通じない。

「はあ〜もお〜、ほらキツシユ。んなことよりもさっさとそれ片付けなさいって。まだまだ仕事は溜まってんだから、何ちんたらしてんのよっ！」

「いたっ」

いきなり背中を叩かれた。いつの間にかラミアさんが戻ってきて

いた。

「いや、ですから僕は……」

「あーはいはい。男は黙ってキリキリ働く。言い訳無用の寡黙労働従事で万事解決なの。さっさと働く。ほらっ、あんたたちっ！　まだ昼休みじゃないわよっ！　サボって駄弁る暇があんならとつと働けっ！」

ズザザアと音がしそうなくらいに、ふよふよとしていた妖精と呼ばれるものたちの動きが一気に活発になった。静けさの漂っていた室内が急にざわめき立つように慌ただしく稼動し始めた。

「ほらキツシユ。あいつらもキリキリ働いてるんだからあんたも働け」

ラミアさんがもう一度僕の背中を叩いてくる。書籍の整頓をしろと言うことは理解したけれど、僕にはまだまだ理解していないことの方が遥かに多すぎて、僕の置かれたこの状況の把握には混乱を感じてしまい、動こうにも体と頭がついてこない。

「ジョンケールッ」

「ごめんねえ〜。ラミアちゃん、豪快に見えて意外と繊細な女の子なの。だから、なかなか片付かないお仕事に苛々してるの」

ラミアさんがジョンケールを大声で呼ぶ横で、エルシエさんが僕に耳打ちしてくる。片付かない仕事に対して苛々するのは分かるけど、だからって今日は挨拶に来ただけなんだけど、いきなり仕事を任せるなんて今まででなかった。

「はいはい。その二人。周りが忙しく働いている中でいちゃいちゃすんなっ。さっさと働けっ」

「い、いちゃいちゃって」

僕はただ話を聞いていただけなんだけど。

「あう〜」

そしてエルシエさん。貴女はどうしてそこで顔を赤く染めますかね。そう言うつもりで僕に話しかけていたというのであれば、男として嬉しいわけなんですけど、今の上京としては相應しいものでは

ないと思うのですが。

「ラミア様、お呼びになりやした？」

ジョンケールはやつぱり大きい鳥だ。そして人間の言葉を話している。これは夢なんだろうか？ 僕はきつと小鳥の見ている夢の中の登場人物なんだろうかと錯覚を覚えてしまう。

「今日はキツシユの仕事のサポートして。キツシユには明日からあたしが仕事教えるけど、今日は片付けだけなんだからあんたでも出来るでしょ？」

「ええ、そりゃあまあ」

「ならよろしく。ほらエルシエ、あんたはさつさとシオリを探してくる。見つかるまでは戻ってくるな。良いわね？」

「ラミアちゃん、キツシユ君を独占するのは、良くないと思うの。むしろ私の方がシオリがどこにいるのか分からないんだから、人では多くあつたほうが良いと思うの」

うん、何だろう。少しだけ嬉しく思える発言のような気がする。

「必要ないない。あんたが人前で毒吐けばシオリは飛んでくるんだから。むしろこっちはまだ外にも書籍が残ってんだから妖精たちだけじゃ足りないの。ほら、行った行った」

「あ、ああん、もお〜ラミアちゃん〜」

ドタドタとしている間にエルシエさんがラミアさんに外に追い出された。

「さて、あつしらも行きやしよう、キツシユ様」

「え？ あ、えつと」

「大丈夫でさあ。あのお二人はいつもあんな感じですよ」

飛ぶ姿にその大きさを感じたけれど、今僕の隣をトコトコと歩くジョンケールも十分に大きい。ジョンケールは一体何類に分類される鳥なんだろう。猛禽類かな？

「いや、そうじゃなくて、エルシエさんに説明を受けるはずだったんだけど……」

そのエルシエさんは精霊指定図書館から追い出された。戻ってき

たラムミアさんは、なにやらその辺にいた妖精を引き連れて僕に渡したよりも多い書物を抱えて、またどこかおくに消えていった。忙しい人だ。

「それならあつしがお話ししたしやしょう。あつしはこれでもこの蔵書の中じゃ、最古参もんも古参もんでさあ。ラムミア様やエルシエ様よりも詳しいでさあ」

どこに行けばいいのか分からない僕のことを、見透かすようにジョンケールは僕の前を歩いていく。鳥の後ろをついていくなんて初めてだよ。何か違和感を感じるけど、今は致し方ない。僕にはそれしか出来ないのだから。

「とりあえずキツシユ様。こつからはちつとばかり階段を上がってもらうことになりやす」

「あ、はい」

奥の方へ連れて行かれると、木の枝の棚が見えていた部分とは異なっていて、ここが室内だと分かる建て作りになっていて、普通に階段があった。

「エレベーターもあるんですがね、今は定期メンテナンス中で、明日まで閉鎖なんでさあ」

「良いですよ。時間もありませんし、一通り見ておきたいので」

「そうですかい。そう言ってもらえると、あつしも気が楽になりませあ」

さあこつちでっせ。と、ジョンケールが翼を広げて手すり越しに僕に並んで飛ぶ。翼を広げるとなれていない今だからか、少し恐怖心が湧いた。

「ところで、どんなことからお話ししようか？」

階段も木の質感のある優しい作りだ。時々軋む音も少しだけ沈む感覚も、僕には心地よいものに感じられた。今までにないライブラリーの形と雰囲気、そして今までに見たこともない生き物たちの中で働くことに関して、混乱と戸惑いはあっても、僕にはそれ以上に興味と言う感情が強く今は支配しているのかもしれない。

「えっと、それじゃあ、とりあえずこの精霊指定図書館ってどう言う所なのかからお願いしても良いですか？」

「つまり、最初からってことですか？」

「はい。お願いできますか？」

「構いやせん。ここで働く以上、キツシユ様にもライブラリーとは異なるこの書庫について知ってもらおう必要性もありませう。分からないことあれば、遠慮なく聞いて下させう」

「ばっさばっさとジョンケールが羽ばたく度に風が吹く。緑が多いせいか、その風が顔に触れてくる度に爽やかな涼風が心地良い。」

「ここは、一般ライブラリーとは別の範疇に収められる、通称森の図書館、ウォルトライブラリーにある精霊指定図書館でさあ」

「その、通称と言うのは、どう言う事ですか？」

「ここを見ての通りでさあ」

ジョンケールが階下を見てくだせえ、と僕を呼ぶ。僕は言われるがままに手すりから下を見る。

「森の中みたいだ……」

下からだど気づかなかった。桜の木に何かの大樹の枝の棚だけじゃなく、この室内空間自体に森のような木々や草花が生い茂っているのがよく見えた。

「ウォルトライブラリーはアバラン州唯一の精霊指定のされたライブラリーなんでさあ。そのためゆうか、精霊の暮らしやすい環境として、ここ、精霊指定図書館は緑が多いわけですわ」

「それが由来して？」

「ええ、そうです。精霊指定の図書館をご覧になるのは初めてですかい？」

ジョンケールが僕のことを意外そうに見てくる。それこそ僕には意外なだけだ。

「はい。通常、このような環境下での書籍の保管は適さないはずでは？」

「一般書物であればの話でさあ。ここに所蔵された書籍は全て精霊

指定された、精霊の宿る本なんでさあ。故に一般ライブラリーのよ
うな保管はかえって、精霊には悪影響なんでさあ」

「知らなかったな。と言うよりも、信じられないと言う方が正しい
かもしれない。」

「まあ初見であるならキツシユ様のその訝しげな表情も理解できや
すが、事実はこちらにあるんでさあ」

「え？　ぼ、僕、そんな顔してました？」

「ええ、もうそりゃあ。あつしのことも不審そうに」

軽い口調でジョンケールは僕を誘導していく。少しだけ書物の重
みとどこまで上がるのか分からない階段の多さに疲れてきたのを堪
えてついていく。

「す、すみません。今までライブラリー勤務の中では知りもしなか
ったもので」

「良いんでさあ。精霊指定を受けたライブラリーは、そう多くはあ
りやせん。知らぬ司書官も多いもんでさあ」

鳥にフォローされる僕って、正直複雑だったりする。

「そうゆうわけゆーか、ここ、ウォルトライブラリーの精霊指定図
書庫に蔵書されてるんわ、全てが州立ライブラリーより指定された
初版本の蔵なんでさあ。どの書物にもあつしのような妖精が宿っ
てるんでさあ」

この室内にいる人間以外は全て妖精でさあ、とジョンケールもエ
ルシエさんと同じことを言う。

「あの、その妖精と言うのは何なんですか？」

「妖精は妖精でっせ？　キツシユ様、妖精をご存じない？」

また意外そうな声。だから、それが僕には意外なだけどなあ。

「書物には妖精が宿るんでさあ。それも初版本のたったの一冊だけ
に限って」

冗談で言っている声色じゃないのは分かる。分かるけど、それを
信用するには判断材料がなさ過ぎると、僕の頭はジョンケールの言
葉を受け付けない。

「それは、処女本ってこと？」

「そうですね。初刷の一冊目。その書籍のみに精霊は宿るんですね。そして、この精霊指定図書館にいるあいづらも、あつしもみな、その書籍からラミア様とエルシエ様のお力より解妖されたんですね。」

「かい、よう……？」

ジョンケールが当たり前のように言う。でも、僕にはそれが分からない。分かる人の話を分からない人にされても、それは意見の押し付けにしかならない。出来ることなら分かりやすい言葉に変換してもらいたいな。

「ああ、すいやせん。ここへ来る人間はラミア様がエルシエ様だけなもので、どういきやせんね。」

ジョンケールが苦笑するように笑いながら先の踊り場の手すりに止まった。

「あつしら妖精は自分の力では書籍から出るとは叶わんですわ。」

「そうですねですか？」

聞いておきながら、僕は半信半疑と言うよりも八割疑惑の二割理解不能が本音だ。

「ええ。あつしら妖精にはファンタジーで見るとな力は何一つ持つてはいないんですね。あるのはただ一つ。あつしが生まれた書籍に込められた思いを抱き続けるだけですね。」

著者の思いを記された書物の思いを抱き続けることが、妖精の力、と言うわけか。うーん、納得しようにも確証を確実に手の内に出るものがない。

「そんなあつしらを解妖してくれたのが、今から八十六年前の国立ライブラリー司書官ルルエルド・アーモンドなんですね。」

「え？ あのルルエルド司書官が？」

ジョンケールの口から出てきた言葉に、僕は驚いた。

ルルエルド・アーモンド史書官と言うものは、今から四十一年前に死去した司書歴史の中では最も知名度のある司書官だ。国家司書試験の時には必ずルルエルド司書官の供述や論述が出る。ルルエルド

司書官の功績は知っている。図書館学の中で必ず出てくる。この国のライブラリーへの多くの私用蔵書の提供と、教育施設への配本、教育書籍の制作、製本、禁止目録書の選定委員会考案など、ライブラリーに関するだけのものでは、それはそう大層なものではない。しかし、ルルエルド司書官にはいくつかの司書官としてではない記録が残されていた。

一つは祭祀としての布教活動への従事とそれに伴う布教の為の物語の制作。今から三千年も昔から続くイエス教の祭祀として、ルルエルド司書官は積極的な慈善・奉仕活動と共に、教典の偏見を紐解くための物語を再編成して出版した。その冊数は現在では推定九千万冊と言われている。僕も完全に読んだわけではないけど、抜粋された一部は講義で読んだことがある。再編成されたその物語の印税は全てが司書官育成のための費用に寄付され、いくつかのライブラリーも建てられた。

「あれ？ そう言えばこのライブラリーは……」

一つ思い当たる記憶に辿り着いた。

「そうであらう。ウォルトライブラリーは精霊指定を受けた初めてのライブラリーであらう」

そして、もう一つ。ルルエルド司書官には科学解明されることになかった能力があったと言うこと。俗称で言う霊能者と似たようなものだと聞いたことはある。僕が生まれてからまだ二十数年。どういふ人だったのかは記録資料映像などで見ることがないから、事実には知らない。それでも、ルルエルド司書官は、人外的な能力があったとされている。

「そして、ルルエルド司書官は解妖の能力を持っていらしたんです。あ。そうして初めて解妖された妖精が、今は国立ライブラリーにある精霊指定図書を取り纏める、神霊享受指定図書館の司書総括長をされているんですわ」

「神霊享受指定図書館？」

そんなものが国立ライブラリーにあったのか？ 初耳だ。

「まあ一気に話したところで、この辺りの話は難しいもんでさあ。とゆうことで、話をウォルトライブラリーに関してに戻しやすが、良いですかい？」

「あ、はい。続けてください」

衝撃的な告白の連続に、僕の頭は情報処理に追いつかない。

「このウォルトライブラリーの精霊指定図書館はアバラン唯一で、ラミア様とエルシェ様も元は国立ライブラリーから転属された特別一等精霊指定ライブラリアンなんでさあ」

「ライブラリアン……？」

司書官と言うことなんだろうけど、そんな役職はあったかな？

少なくとも僕の記憶には新しく組み込まれた言葉だ。

「キッシュ様の取得された国家資格の司書官というものとは別にある、もう一つの司書官の資格でさあ」

「そうなんですか……」

聞いたことがない。そんな資格があったなんて。

「ライブラリアンの資格は一般では取れんですわ」

次第にしんどくなってくる足と腕を見計らうようにジョンケールがゆっくりでいいでっせ、と時々小休止を挟んでさらに階段を上がる。その間も妖精が僕に挨拶をしてきた。変な気分だった。ジョンケールとの会話も違和感が拭えないのだけれど。

「それじゃあ、どういふものなんですか？」

「ライブラリアンはルルエルド司書官の能力である解妖の技術を身に付けた者飲みに与えられる特級の資格なんでさあ。その為、通常は公にされない資格なんでさあ」

だから僕も知らないのか。まだまだ僕の知らないことも多いと言ふことなんだろう。

「それはどこかで研修とか履修会とかがあるんですか？」

ふと休憩がてら手すりからどれほど上ってきたのを見下ろしてみ
て驚いた。

「いえ。適応条件審査はありますが、細かいものはありやしないん

ですわ」

「そうなんですか？」

ふくらはぎも少しパンパンになってきたと思ったら、もう随分と上階まで上がってきてた。見上げていた桜の巨木の天頂部が僕の視線に並んでいた。

「はい。ただその条件は厳しいもんなんですわ。ラミア様とエルシエ様は幼子よりの知り合いでして、当時から書物に触れていた影響もあつてか、解妖順形式で見事にライブラリアンの能力を得られたのでさあ」

「解妖順形式？」

ジョンケールの口から出てくる言葉はどれもチンプンカンプンだ。「ああ、すいやせん。解妖順形式ゆうんは、ライブラリアンになるための儀式ですわ。あつしらも式の様子までは分からないんですが、不思議なものらしいですわ。ラミア様もエルシエ様もその式を無事に終えられて、あつしら妖精を解放してくださいる恩人なんでさあ」

どこかから時折聞こえてくるラミアさんの指示を飛ばす声を、ジョンケールはどこかおかしそうに小さく笑いながら僕を誘う。

「ジョンケール、さん？」

「ジョンケールで良いでさあ、キツシユ様。あつしらは妖精ゆうても出来ることは少なく、あつしらの生みの親は作家で人間なんでさあ。だからゆうわけやないんですが、妖精たちは、人間を敬うんですわ」

本から生まれた妖精だと言っていた。それは端的に言えば本を作るのは人間。その原作を書くのも人間。だから妖精たちにとっては人間は親も同然と言うことなのか。それは信憑性がないんだけど、信じるしかないよな、こう言う光景を目の前にして、現に僕は鳥と言葉を交わしているのだから。

「じゃあ、ジョンケール。あなたたちは本から生まれたと言っていましたけど、それはどう言うことなんですか？」

僕の前をパタパタと飛んでいたジョンケールが僕の問いかけに、

手すりに止まって二本の爪足で僕に振り返った。

「キツシユ様。貴方はこの世界に誕生した瞬間の記憶と意味をご理解されてますかい？」

「え？」

問いかけに問いかけで答えられ、予想もしてなかったから返し言葉がすぐに出てこなかった。

「ただだけ……？」

「あつしらは、いえ、あつしの場合で言いやす。あつしはイルマード・トリステイア様がレッドウォーレックを執筆された時に生まれやした。それでも、あつしは解妖された時に、書の中だけでの誕生より、この世界へ具現として改めて誕生しやした」

「ジョンケールの口調は真面目だった。だから僕も一旦先へ進む足を止めてしまった。」

「その時の記憶と言うものはありやせん。気がつけば作中でのあつしの姿がラミア様とエルシェ様の下にありやした。あつしは今だからこそ分かりやすが、その時は解妖された意味も記憶も分かりやせんでした」

「それは、人間も同じ、と言うことですか？」

「そうではありやせんか？」

「僕が生まれた時の記憶と、僕が生まれた意味か。そんなものは覚えてないし、もう二十年も生きてるのに生まれた意味は分からない。」

「いや、同じだと思う。少なくとも僕はそうですね」

「そう言うことです。あつしら妖精は作品から生まれこそしやすが、生まれ出た当初は人の赤子も同じなんでさあ。多岐に渡る世を知り、学び、今を迎えているんですわ」

「そうか。妖精と言っても人間よりもはるかに高い知性や命を持っているというわけじゃなく、人の生きる道いや、生物の生きる道と同じなのかもしれない。」

「まあ、あつしは今の姿に満足してやす。作中で生き続けることも嫌ではないんですが、こうして精霊指定図書館で自由に過ごせる時間と言うものは、書物の中ではありえないもんでさあ。そうゆうわけで、ここに居る妖精たちはみな、のびのびとしてる思うんですわ」

「ジョンケールの言葉は理解できるかもしれない。僕の目の前を浮

いている妖精も、本を抱えて走り回っている妖精もみな、嫌々に動いているようには見えない。

「それでも、あつしらには必ずしも自由はないのも現状なんでさあ」

「え？」

「これだけ自由にいるのに、それでもない？ 僕にはそうは見えないんだけど。」

「あつしらがいられるのは、この精霊指定図書館だけでさあ。この室内じゃ自由ですが、ここより出るとは目録書の妖精以外は禁止されとるんですわ」

「ああ、そういうことですか」

その理屈は分からないでもない。言葉は悪くなるかもしれないけれど、こんなのが街中に普通にいたら誰もが驚くはず。その中で友好的な人もいれば、そうじゃない人もいる。分かるのは、混乱が起きると言うこと。僕だって今も困惑してる。それこそ本の世界に飛び込んでしまったような、現実世界の落とし穴から物語の世界に落ちてしまったようなものしか感じられない。立体映像でもなんでもない、現実として妖精と呼ばれる本の世界から飛び出した生き物たちが溢れているこの不思議空間は、僕には理解するには時間が掛かりそうだ。

「それでもまあ、十分に自由なんですけど」

ジョンケールがそう言っただけで、僕に行きやしようと促して、僕もそれに従った。

「この辺りからでさあ」

ジョンケールについて行くと、随分と高所の棚にまで来ていた。

「高所は大丈夫ですかい？」

「ええ、まあ。少し足が竦みそうですけど」

言われて下を見ると、さっき見下ろした時よりも随分と高さが増していた。桜の巨木があればほど小さいものだったのか不思議に思うくらいだった。

「キツシユ様。それらの本は背表紙の下に記された番号ごとに枝棚に番号がふつてありやすんで、そこに収めて下さいですわ」

「はい。わかりました」

近くのテーブルに書物を置くと腕が軽くなった。ジョンケールに言われた通りに一冊一冊に記された背表紙に記された五桁の番号に合わせてライブラリーにある普通の木造本棚のように綺麗な作りではない枝を利用した凸凹な本棚に仕舞う。

「ジョンケール。この本棚はどうしてこう、不揃いなんですか？」

本を仕舞う度に同じ書籍の高さでも、棚が歪んでいたりするおかげで整頓されているんだけど、何だか僕には少し落ち着かなかつた。

「この精霊指定図書館はもともと普通の室内だったんでさあ。でも、あつしら精霊は誕生が作中であってもガンライの存在は自然発生なんでさあ。だからと言うわけではないんですが、あつしらにとってはこの自然木を利用した不恰好な棚に収納されるほうが落ち着くんですわ。不規則なものだからこそ、規則的に縛られるんは、あつしらにはしんどいゆうことです」

そういうことだったのか。僕にとっては生前と整頓されている書を見る方が落ち着くんだけど、妖精にとってはより自然に近い方が落ち着くと言うことなんだろうな。

「ラミア様はこの不揃いな書棚に苦労されておられるようですが、こればかりはエルシエ様のお達しがウォルトライブラリーには影響力を持つておるんですわ」

「エルシエさんの？」

下を除いてみるけれど、エルシエさんはまだ戻ってきてなかった。代わりにやたらと大きな寸胴体のおっとりとした妖精と目があった。

「あいつあ、口口言います。エリソン・ガーリック様の著書、口口とココミゆうファンタジー小説に出てくる妖精なんですわ」

「そうなんだ」

下から僕を見上げている口口に会釈をすると、口口もゆっくりと

僕に向かつて同じように頭を垂らせた。

「色々な妖精がいますよね？」

「ええ。驚かれましたでしょう？ あっしらはここから出られないこともあってか、ここには所蔵されている書籍の数だけ妖精が居るんですわ」

ジョンケールの言葉に仕舞おうとしていた本を持つ手が止まった。「え？ それはつまり、ここにある本の全てに妖精がいる、ということですか？」

ざっと周囲を見回す限り、妖精の数は数十程度。狭いようで意外と広い室内にしてみればなかなか多く見える。けれど、ざっと見の限り、所蔵されている書物の数はその数百倍は軽くある。僕が上がってきた階は、背表紙と枝棚の番号を見るあたり、一般ライブラリーと同じように、下三桁は棚番号、上二桁は階層番号になっている。そして僕が今仕舞おうとしている書籍にある番号は27515。つまり二十七階にある棚番号五百十五に所蔵されるべき書物と言うこと。ここって二十七階だったんだと言う、高所の意外さに啞然としそうになる。けれど、ジョンケールの話を聞いていると分かる。この精霊指定図書館に所蔵されている書物の総数は計り知れないほどに多い。室内を占めているのは中心部の巨木桜と植物。そして後はガラス天井まで四方を取り囲む枝棚。その全てにとっても良いほどに書物が所蔵されている。これだけの数の妖精がいるとなると、室内はかなりの圧迫になるんじゃないのだろうか、あまり想像したくないことに気づいてしまった。

「その通りでさあ。所蔵本は全て初版第一刷本ですわ。この書庫にある本はすべて妖精が宿ってるんでさあ」

僕が仕舞っていつている本は、確か解妖がまだとか言っていた。つまりまだこの本の中に僕の視界に時折入る妖精がいると言うことか。何だか乱雑に扱えない、本からの無言のプレッシャーを感じてしまう。

「そうはゆうても、さすがに全ての妖精を解妖するとあっしらでこ

こは多い尽くされてまいります。そんなわけで、ラミア様とエルシエ様には定期的にあつしら妖精の入れ替えをして頂いてるんですわ」

入れ替えか。妖精の世界も肩身が狭いのだろうか。少しばかり哀れむような、訝しいような不思議な感覚が残った。

「不思議な世界なんですね、妖精と言うものも」

僕はジョンケールのみならず、この室内にいる妖精と言うものに対して、不思議な生物だと言うことの一言で片付けることにした。違和感がないわけじゃない。それでも、読書をしている以上、嫌悪感はない湧かないのだ。むしろ好奇に近い圧倒感のようなものだけがある。

「あつしらに言わせてもらえりや、人様も似たようなもんでさあ」

僕の言葉にジョンケールが声を震わせて笑うように鳴いた。やはり鳥なのだと、その姿に僕は苦笑した。

「それにしても、エルシエさん戻ってきませんね？」

所蔵本の冊数に驚きながら、任せられた書物を棚に入れていく。やはり慣れていないせいか、不揃いに並ぶ書物を見るとどうしてもきちつと整列させてぴっちりとした衝動が湧く。

「シオリは忙しい小童なんでさあ。一度ここを出るとなかなか戻ってきやせんのですわ。あ、キツシユ様。あまり強く棚に押し付けんといて下せえ。上層階の枝棚は下層階に比べると枝が細く軽くなつとるもんで」

「え？ あ、ああ。ごめんなさい」

しつかりと見られていた。

「まあこんな形の書棚があるのはウォルトライブラリーのここくらいでさあ。綺麗に整頓したい気持ちは分かりやすいが、どうか堪えて下せえ」

「うん。どうも早く慣れないといけないみたいです」

苦笑しか出なかった。まっすぐな棚にきちつと整然された書物に囲まれての仕事ばかりだった名残は、そうそうには改善出来ない。妖精たちにとっては心地良い収納方法なのだろうけれど、僕からす

れば精霊指定図書館にある書物はどれも乱雑に仕舞われていて、かえって落ち着かない。

「慣れとは恐ろしいものでもありやすが、同時に非常識が常識になる本能なんでさあ」

「非常識が常識に、か。そうかもしれないね」

科学技術が発達している世の中の影響も少なからずある。だからこそ、僕の驚きは刻一刻と納まり、この現状を徐々に当然のものと言ふ不文律などお構いなしの常識と捉え変え始めている。きつとこのような書庫があることが世間一般に多く知れ渡れば、妖精のことに關しても遙か昔に今ではビジョンとして知られている、その前物のテレビなどの登場の頃のような異質感があつたりするのだろう。そして、認知されるにつれ、要請があることが当然となり、常識へと変わる。異質から知らないほうが変と思われることへの変質は、人の世ならではののだろうか。書に触れているとその先駆けであったり、退行であつたり、多岐に渡るストーリーに混同しがちになつてしまう。

「ラミア様は初めから当然のごとくあつしらに接して下さいましたが、エルシエ様はキツシユ様のようにやはり驚かれたもんでさあ」

逸れかけた話の対象であるエルシエさんへの話題が修正されてくる。ジョンケールは言葉による導きが上手い。きちんと聞き分け、僕に導へと誘う。開かれたページから広がる無限の本世界ブックワールドのように

あつ、ちよつと？

「エルシエさんが、ですか？」

あの温厚そうで人当たりのいい、それでいてどこか悪戯好きな子供のようなほんわりとした雰囲気で、人のペースを自分のペースにってしまう人が僕のように驚く？ とてもじゃないが想像出来ない。むしろ僕の短時間でのエルシエさんの印象からすれば、

『わゝ、わゝ、かゝわいい』

とか、

『ねえねえ、君、だあれかなあ？』

とか、

『あのね、ちよつと触っても良い？』

とか、実にファンシーな一面を見せつつ、妖精たちとの交流を進めていきそうなことしか考え付かないのだけれど。

「まあそうはゆつても、エルシエ様はラミア様と違って寛容でもありません。驚きに対しても恐怖よりも、単純に好奇に満ちた驚きになるんですがね」

ああ、やつぱり。あの人はどう考えても僕のように取り乱すことはいないだろう。

「今ではエルシエ様もすっかりライブラリアンとして功績を残されて、ラミア様同様にあつしら妖精にとっては数少ない心許出来るお方なんでさあ」

「そうなんですか。確かにエルシエさんなら、不思議と和む、と言うか引き込まれますね」

ラミアさんは一方的過ぎてまともに会話を出来ていないから、何とも言えないけれど、エルシエさんに関しては同感かもしれない。

「キツシユ様もお話が分かるお方ですわ。きっとこの妖精たちも宜しゅうしてくれますわ」

そうだと良い、のかな？ 悪い気はしないけれど、今はまだあま

り好い気もしない。まだ払拭できていない僕の心に問題がありそう
だ。この精霊指定図書館で異質は、恐らく僕の方なのだから。

「おや？ エルシエ様のお帰りのようですか？」

僕が最後の一冊を棚に仕舞うと、ジョンケールが手すりに乗り、
下を見ていた。ついでにその隣から僕も見下ろしてみると、あまり
の高さに頭の中がスツと軽くなったように寒気のようなものを感じ
た。

「キッシュ様、とりあえず片付きましたし、戻りましょうか？」

「そうですね。……ああ、またこの階段を下りるだった」

戻りやしようと誘うジョンケールに続いて降りるのは、やっぱり
長い階段。十分以上階段を上ってきたのに、またそれを降りなけれ
ばならない。そう思い当たった瞬間、忘れていた疲れが再発してき
たように僕の足は重くなった。

「大丈夫でさあ。奥の扉はエレベーターになってるんですわ。下り
はそちらで行きましょう」

そう言ってジョンケールが書棚を歩いていき、奥にある装飾され
た扉の横のスイッチをくちばしで突いた。

「あの、ジョンケール？」

「はい？ 何ででしょうか？」

僕の聞き間違いだろうか？ そして、僕のみ間違いだろうか？

ジョンケールがくちばしを突くと、木製ドア化と思っていた扉が自
動的に横開きに開いた。そしてその奥にはシンプルなエレベーター
の内装が見えた。

「エレベーター、あるんだ……？」

「ええ、ありやすよ？ さすがにラミア様もエルシエ様も女性。こ
うも長い階段の上り下りに書物を抱えては、重労働でさあ」

ああ、何だろう。今僕の心底に沸き起こるこの感情の高まりと、
失落する思いは。

「ああっ！ すいやせんすいやせん。別に冗談のつもりでキッシュ
様にしたわけやないんすわっ」

ジョンケールが僕に振り返って、僕の顔を見た途端に謝罪をしてくる。今の僕の勘定は表情にも出ていたようだ。

「あるならどうして使わせてくれなかったんですか？」

僕の言葉にジョンケールが尻込みをする。そんなに僕の顔は恐ろしい形相なのだろうか？ そんなつもりは少ししかないのに、何だかシヨツクだ。

「いえ、ここで働く以上、こんな階層まで来ることは茶飯事でさあ。それに見慣れてもらう為にもこうして階段を使う方が、妖精たちも所蔵本たちのこともご理解頂けると思いやした所存ですわ」

姿かたちは鳥だから基本的に表情に変化はない。声色でその表情はよく分かるのは、やはり動物ではない証なのだろう。

「……言いたいことは分かりました。確かに疲れこそしましたが、大方の本配置などは覚えたくもりです」

「そ、そうでつしやる？ さすがは司書官様でさあ。これだけの所蔵本の配置をあれだけの短時間で記憶されるたあ、大したもんです、はい。いやはやキツシユ様、貴方はライブラリアンの素質もあるやもしれませんっ！」

赤い羽根を広げて僕の背中を叩くようにエレベーターの中に押し込む。何だろう？ ジョンケールが次第に威を借る狐のような、凶々しさのあるお調子者のように見えてきた。

「あ、あっしは飛んで戻りますんで、キツシユ様はどうぞごゆっくり」

ハタハタと赤い羽根を僕に振りまいてくちばしでスイッチを押す。閉まる扉の向こうに見えたジョンケールに、何故だか怒りよりも微笑みのような笑いが漏れた。

嫌な予感……

「はあ、はあ……ふう」

エレベーターが着くと、扉の先に桜を纏ったように揺れる長い髪が見えた。

「エルシエさん、おかえりなさい」

「あ、うん。ただいま、キツシユ君」

戻ってきたエルシエさんはどことなく疲れたように少しだけ呼吸を乱していた。

「エルシエ、それでシオリは？」

何度か大きく息をついて落ち着きを取り戻したエルシエさんの前に、ラミアさんも戻ってきた。

「へ？ あれえ？ 戻ってきてないかな？ こつちに走つてくの見ただけど」

ん？ とエルシエさんが小首を傾げながら人差し指を唇に当てた。この人の一挙手一投足はいちいち絵になる美しさがあると思う。どことなく、エルシエさんこそ妖精という言葉が相応しいような。

「キツシユ、あんたは見てない？」

「はい？ 何をですか？」

いきなり話を振られても分からない。

「んーとね、これくらいの子の子なんだけどお」

エルシエさんが僕の腰に手を当ててくる。どうして僕の体で、その女の子を大きさを示すのだろう？

「女の子と言われましても……」

もう少し特徴がないと、僕の腰ぐらいの女の子はいくらでもいる。不特定多数を示されても、僕には二人が探しているシオリという子がどのような子なのか検討もつかない。

「本よ、本。えーと確か……」

ラミアさんが顎に手を置いて人差し指で眼鏡を上げる。この人も

この人で憐とした大人の女性ののような魅力を醸し出している。

「春の植物って小さな図鑑だよ。ラミアちゃん、ちゃんと処分図書のことも覚えてよお」

「あーそうそう、そんなやつ。で、見なかった？」

さりげなくエルシエさんの苦言を流し、僕にその本を持った少女を知らないかと聞いてくる。

「春の植物ですか？ 春の植物……？」

あれ、何だか覚えがあるようなタイトルだ。

「ん〜？ もしかして、キツシュ君、シオリを見かけた？」

「あつ、そうかつ」

そうだ。僕が駅で拾った本だ。

「ん？ 何？ 知ってんの？ どこにいた？ あの馬鹿娘は」

「あ、いえ。シオリという女の子は知りませんが、その本なら…

…」

中央部の桜の巨木下の段に置いていたカバンの中からさつき拾った図鑑を取り出す。

「これ、ですよね？」

「そうそう、それよそれ。……って、何であんたが持つてるわけ？」

「これ、ウチのコード張られてるよね？ この本、持ち出し禁止だよ？？」

二人が僕に疑いの眼差しを向けてくる。

「いえ、持ち出してはいけませんよ。ここへ来る途中に駅で女の子が警備員に追いかけてられていて、その子が落とした本ですよ」

実際にその女の子が、これを落としたのかは分からない。その現場は人ごみで見えない。けれど、捨てられたにしては綺麗だ。つまりはその可能性が高いだろう。

「駅〜？ あんの馬鹿は。つたくどこまで逃げてんのよ」

ラミアさんが盛大にため息を漏らした。

「でも、良かったね、ラミアちゃん。これでシオリも帰ってくるよ」
エルシエさんは嬉しそうに僕に寄ってくる。

「ありがとう、キツシユ君。この本はね、処分図書って言って、もうすぐ廃本として焼却処分されちゃうところだったの」

にっこりと微笑まれると、ほんわかと優しい気持ちになる。

「でも、処分図書は珍しいものじゃないですよ？ そんなに大事な本なんですか？」

書物は基本的に定期を過ぎるとその売り上げに応じて増刷されたり処分される。最近は電子書籍に押され少なくなってきてはいるが、その中でも形ある書物は一冊は確実に半永久的に国立ライブラリーに寄贈され、所蔵される法律がある。廃本になるのは珍しくないと言つのに、この図鑑はそれほどの価値があるものなんだろうか？

「まあね。これは一応第一版の初刷り本なの。本来は国立ライブラリーの神霊指定に流されるはずだったわけなの」

「でもね、どうしてかウチに流れてきて、ちよつとの間行方不明になつちやつてたの」

行方不明って。それは何ですか？ つまり管理がずさんだったからどこかへ紛失したと思つていたと言つことですか？ そう聞こうにも今の僕にそんな権力はなかった。

「じゃあ、どうしてこの本をその女の子が？」

「それはね、あつ、ちよつと待つてね。今呼ぶから」

エルシェさんがいきなり話題を転換して、僕に背を向けて段上を登つていく。

「何をするんですか？」

「まあ見てれば分かるわよ。エルシェ、結構黒いから」

ラミアさんの苦笑の意味を理解出来ない。そして見つめる先のエルシェさんはリズム良く段を上がり、桜の木の下に立った。なんと言うか、やっぱり桜の妖精のように見えた。

「シオリちゃん、早く出ておいで。三数えるうちに出てこないとお、この本燃やしちゃうかなあ」

そしてエルシェさんがなかなかの大声で、そう言った。

「い~~~~ち」

「あ、あの？」

「ああ、気にしないで。あれもアホの子だから」

いきなり何を始めたのかと思いきや、脅し。出てこないと本を燃やすぞと、のんびりとした口調で数え始める。

「にい〜〜い」

「でさ、キツシユ。渡した本、全部片付けてくれた？」

「あ、はい。ジョンケールに教わりながら一通りは」

「ん、よし。あんた仕事できんじゃない？」

「明日からなんですけどね……」

「気にしない気にしない。明日も明後日もどっちも一緒」

ニツと笑うラミアさんの口元には可愛らしい八重歯が顔を覗かせていた。綺麗な人だと思っていたけど、気さくなお姉さんと言う感じに脳内で多少修正された。

「さあ〜〜〜」

「うっわああっ！ 待つて待つて待つて待つてえっ！」

「え？ うわっ！」

エルシエさんがさんと言い終えようとしていたら、奥の書棚の方から小さな妖精たちを押しつけて、時折口口のような寸胴な妖精の合間を掻い潜って女の子が飛び出してきた。なぜか僕の体に向かって突進するように。

「あ〜〜〜んっ」

そしてエルシエさんが数え終わると、ふふ〜と笑顔を携えたまま段を降りてくる。

「いつてて……」

腰に響く痛みに、僕は少し吹き飛ばされた。不意打ちの衝撃には対応出来ない。

「あ〜あ、キツシユ、大丈夫？」

「あ、はい。何とか」

ラミアさんが困ったような、そうでもないような、何とも取れない微妙な顔で手を差し伸べてくれた。

「シ〜オ〜リ〜？ あんたは今の今までなあにをやってたのかしら〜？」

そして、僕の腰に抱きついたまま起こされる女の子に、ラミアさんがごめかみを震わせて、僕から女の子を引き離れた。

「わあ〜ツ、ごめんなさいごめんなさい。だ、だってだってえ、本なくしちゃったんだもん〜」

叩かれると思ったのか、女の子は自分の頭を両手が押さえながら小さくなった。

「大丈夫だよ、シオリ。ほら」

「ふえ？ あつ、何で？ 何でエルシエ様が持つてるのっ？」

怒り顔のラミアさんの隣から顔の出したエルシエさんが、僕が拾ってきた図鑑をシオリという女の子、のような妖精に見せると表情が一変した。

「キツシユ君がね、駅で拾ってきてくれたんだよ」

「キツシユ、様？」

シオリが僕を見てくる。

「見つかつて良かったね」

とりあえず、事の掌握は多少は出来たから、笑ってあげる。

「ふえ……ふえええんっ！」

「え？ ちよっ、ちよっと？」

いきなりシオリが僕に抱きついてきた。

「あいがとお、あいがとおお、キツシユさまあ〜っ！」

泣いているのか笑っているのか、感情のごちゃ混ぜになった顔で僕を見上げてくる。

「う、うん。良かったね」

それしか言えなくて、とりあえず頭を撫でてみた。正直状況がまるで理解できない。その本自体にどうしてそこまで固執し、ここまですべて僕の胸で安堵するのか。

「やれやれ、新人君に感謝ね、ここは」

ラミアさんが泣いているシオリを見ながら図鑑をパラパラと捲っ

た。

「んふふ。期待出来そうだね、ラミアちゃん？」

その隣では相変わらぬ笑顔のエルシエさん。二人には状況が理解できているみたいだけど、知っているなら教えて欲しい。

「さて、これも結構古いし、そろそろ一回解妖してあげましようかね」

軽い口調で図鑑を閉じたラミアさんが、シオリを僕から引き離れた。

「キツシュ君、どうせだしもう少し良いよね？」

エルシエさんは僕に質問をしているようで、そうじゃなかった。笑顔による拒否返答の拒絶。従うほかは僕には選択肢はなかった。

「角……？」

こつちだよ、とエルシエさんに言われ先に歩いていくラミアさんとシオリの後姿を見て、僕はまた驚かされた。

「うん？ ああ、シオリ？」

僕の声に三人が振り返る。シオリの後頭部には小さな角が生えていた。オシャレにリボンを巻いた白い角がちょこんとあった。

「シオリもね、妖精なんだよ。ねっ、シオリ？」

「うんっ。桜優麗様の楚々坂の木の子鬼のシオリです」

可愛らしくシオリが僕にそう言った。

「子鬼？」

作者からするにジャパンノベルらしい。その後頭部の角もそういう事なんだろう。どのような本なのか、少し読んでみたい気がした。

「現代小説よ。シオリは抽象的位置づけの存在なわけ。実際にこんな姿は登場してないのよ」

「え？ じゃあ、どうして？」

ジョンケールにしろその登場の姿形での妖精化だと言っていたのに、シオリは違つとは、また知らないことが出てきた。

「シオリはね、私たちの拝読後の認識から具現化したの。だから、著者の想定とは少し異なってるかもしれないね」

そう言つてエルシエさんが笑う。この人の笑顔はそれ自身が理由になるくらいに僕を納得させるに相応しいものを感じさせてくれる。「そうなんですか？　つまり、お二人のイメージがここにいる妖精になると言つことですか？」

素直な疑問を投げかけてみた。

「全部が全部じゃないわよ。具体的解釈のあるものならその通りに解妖出来るの。ない場合はあたしたちのご都合解釈の具現よ」

つまり僕のことを見上げているシオリはラミアさんの言う後者にあたる妖精と言つわけか。色々と知らないといけないようなことが多そうだ、今回の派遣先の仕事場は。

「ねーねー、ラミア様あ」

シオリがラミアさんの手を引いた。

「これからするの？」

好奇と期待に満ちた少女の瞳がラミアさんを見上げる。

「そうよ。ちよつと問題あるかも知れないけど、早いほうが手を打ちやすいわね、これは」

そう言つて確証を得るかのようにエルシエさんにラミアさんが図鑑を見せた。

「そうだね。少し時間が経ちすぎてるから、今が限界かも」

人差し指を唇に当て、エルシエさんが小首を傾げながら、もう片方の指を頬に当てた。なぜか僕の頬にまた。

「あの、どういふことでしょうか？」

この人はどうして人の頬を突いてくるのか分からず、その細い指をそつと外しながら聞く。

「ん〜」

ラミアさんまでもが僕に振り返り、吟味するように僕を見る。

「まっ、いつか」

勝手に納得しないで下さい。僕には何がなんだか分からないんですよ。

「さ、始めるわよ」

「キツシュ君も来てね」

「？ はあ」

「いこついいこつ、はやくはやくうっ」

取り残されるわけじゃないのに、疎外感を感じる。

「心配することはありやせん。あの本の解妖を行うだけであ」

先に歩いていく三人に追従しながら、バサバサと下りてきたジョンケールが僕の少し上を羽ばたきながら、僕の疑問を解消してくれた。

「今からするんですか？」

「みたいですよ。あの凶鑑、ちいとばかり古いもんで、面倒が起これなければ良いんですがねえ」

鳥だと姿を見れば分かるのに、その口調のおじさん臭さに、妙な親近感というか変なものを感じてしまう。

「何ですか、その面倒ごとって」

どうもラミアさんやエルシェさんたちの反応を見ると、好奇心半分不安半分の何とも言えない嫌な予感が湧いては消えないのだけれど。

「まあ、あれですよ。百聞は一見に如かずってやつでさあ」

ジョンケールまでもが声を苦笑いに変えて、どうやら僕には経験から知れと言うことをこれから実践させようとしているらしい。いったい何が始まるのだろうか、不安が大きくなった。

「じゃあ、ちよっとそっちの部屋で待ってて」

奥へくると二つの部屋があり、ラミアさんとエルシェさんが右のドアの前に立ち、僕には左のドアへ行くように指示してきた。

「あの、お二人は？」

そして僕の手にはシオリの手がいつの間にか繋がれていた。

「シオリ、あんた案内しといて」

「私たちは着替えてくるからちよっと待っててね？」

着替えに別室へ行くのか。

「はい。キツシュ様、こっちだよっ」

くいつと小さな力が腕から伝わり、少し前のめりにシオリの手に引かれて僕はドアを潜った。

「あれ？ ジョンケールは来ないの？」

「あつしはここで遠慮しておきますわ。キツシュ様、貴方はライブラリアンへの資格がある可能性のあるお方でさあ。これから先のことはしかと目に焼き付けておいて下せえ」

片翼を手を振るように羽ばたかせてジョンケールはドアの向こうに消えた。一抹の不安を残すような口調のおかげで、僕は少しだけシオリの手を離さないように掴んだ。

これが、解妖……？（前書き）

想定外の台風による仕事の空きが生まれましたので、その際に書いてしまいました。

とりあえず、多いと読みにくいと思うので区切りをつけて一段落させました。

次回からはライブリアンについての業務開始になるかと思えます。

これが、解妖……？

「キツシュ様、こわいの？」

強く握りすぎたのか、シオリが僕のことを見上げた。

「そんなことはないんだけど……何があるのかな？」

何があるのか分からないから恐怖を感じるのは人として、生物として本能の発現。

「だいじょーぶだよ。解妖は怖いものじゃないよ。神聖なものだから」

シオリはそういつて僕に笑う。こんなにも小さな子だと言つのに、鬼であると言つことが僕には信じられない。それに僕よりも長い時を生きてきているのだろうし、どうもその姿とのギャップに戸惑つてしまう。とりあえず、シオリの頭の小さな角に関しては、精霊だということを感じる他のない、証拠なのかもしれない。

「じゃあ、行くよ、キツシュ様」

「う、うん」

扉の前で喉が鳴る。何があるのか、何が始まるというのか。期待半分不安半分の中で、シオリがドアノブに手をかけ、下ろす。重たい音が響いて引きドアが開く。

「う、わ……」

よくありそうな光が溢れるとか、真つ暗闇とか、そんな演出はどこにもない。ただ、荘厳で停止した時の刻みが、肌に感じる冷たい空気として、体をすり抜けた。

「ここは、何なんだ……？」

ライブラリーをいくつか見てきた僕自身でさえ、こんな施設は見ることがない。何にもないんだ。それなのに、外観からは気づけなかった巨大な空間。声が木霊する。

「ここはね、フェアリールームって言うんだよ」

シオリの声が幾重にも階段のない塔の中を渦巻いていく。

「フェアリールーム？」

ここで解妖とやらを実施する場所、ということらしい。精霊指定図書館の異質と巨大さに驚かされたけれど、これもまた、想像の範疇になんてない奇異の空間。大木の生えている図書館に隣接するのは、幾何学模様の施された壁画のような壁がはるか天井にある窓の明かりに不気味にも浮かび上がっている。見上げるだけで首が痛くなる。

「うんっ。ここでね、ライブラリアン様が解妖するの」

シオリの言葉は無限ループのように、的を得ているようで得ない繰り返しの言葉にしか聞こえない。具体的説明を求めようにも、空気を読んでもらえるほど、シオリは大人ではないよう。圧巻の空間にただ僕は、言葉を考えることすら忘れてしまっていた。

「さあて、始めましょうかね」

「お待たせだよ」

後ろからラミアさんとエルシェさんがやってくる。思わずまた僕は固まってしまう。

「キツシュ？　どうかした？」

ラミアさんはラフファッションから、礼装とでも言うべきなのか、白と金を貴重とした綺麗な服。身分が貴族にでも変貌したようなお姉さんから王女に見える。ズボラさがまるで夢のように消えていた。「うふふ」。驚いてるんだよね。この姿に

相変わらずの笑みのエルシェさんも、フリルの少女からお妃のように別人へと纏う衣一つで美貌が輝いている。口調は相変わらずでも、先ほどまでの様子とは次元が異なるようにしか見えない。

「あー、そう言うこと。まっ、服くらいで驚かれてもねえ」

「もっと、びっくりしちゃうんだよ」

確定事項らしい。僕が驚くというのは。

「あの、その紋章って……」

ラミアさんとエルシェさんの羽織るロングコートのような装束にある紋章。どこかで見たことがある。それがどこでだったかは、は

つきりとは思いつけず、頭を掻いた。

「ああ、これ？ これは国立ライブラリーの神霊享受指定図書のライブラリアンの紋章よ」

「ルルエルド司書官の功績図書の捺印って言った方が分かるよねえ？」

エルシエさんの言葉に思い出した。ラミアさんの言葉は、ぴんと来るものがなかったけれど、エルシエさんの言うことに、記憶が波のように甦った。

ルルエルド司書官の刊行本は功績図書と言う唯一のジャンルに指定されている。その本の全てに押されている捺印と同じなんだ、二人のその紋章は。

「ど、どうして、その捺印が紋章になっているんですか？」

「だから言ったでしょ。これが神霊享受指定図書の紋章だって」
いえ、そう言うことを聞きたいわけではないんですが。

「これはね、ライブラリアンの中で、カイヨーの鍵なんだよっ」
シオリが裾を引張る。

「鍵？」

「うん。シオリ、ちゃんとお勉強したんだねえ」

エルシエさんがシオリを撫でる。皇族が市民にふれあいをしているように見えた。むしろ、シオリの笑顔を見ると、親子のような気もしないでもない。

「これはね……」

「説明するより見るほうが早いわよ。エルシエ。ちゃっっちゃつとやるわよ。仕事はこれだけじゃないんだから」

エルシエさんの解説に耳を傾けようとしたら、ラミアさんが強制的に区切る。百聞は一見に如かずというわけらしい。

「館長の承認は取ってきたから、早速始めるわよ。ムーン、ノード。あんたたち、手伝いなさい」

図書庫の方から、二体 精霊の数え方を知らないから、そう数えるが、ジヨンケールとは異なる青い鳥とのっぺらとした巨人獣

のような、妙な精霊が入ってきた。

「ムーン。あんたは上層の楼台にこれを灯してきて。ノード、あんたはいつも通りにね」

甲高い鳴き声と共に、ムーンと呼ばれる鳥の精霊が嘴に灯火台をラミアさんに預かると飛び上がる。一方で僕の隣にいるのぺっとした、何とも表現しがたい大きな精霊のノードは、ぼーっと隣に立っている。不思議と威圧感と言つか、巨大なものが発する空間圧迫する気圧がまるでない。糸のように感じるものがない。

「こら、ノードッ。ぼーっとしてないで、さっさと動くっ」

ラミアさんが叱咤した。どうやら性格は極めておっとりなようだ。ノオーっと、気の抜けるような声を漏らしながら、ゆっくりと空間の中央部へと歩いていく。足音もなく、空気のような軽さが、背中を見ていて感じられた。

塔　と叫ぶべきなのか、ホールとは異なる狭く高い室内。狭いと言っても百数十人は入れそうな広さ。それでも天井の高さが尋常ではなく、やはり塔と言うべき建物。その中心に立つノード。入れ替わりのようにムーンが降りてくる。天井に揺らめく炎の明かりが僕らにまで陰を生む。

「この二体も、やっぱり本から、なんですよね……」

「そうだよ。ムーンは三百年前に絶滅した鳥類の精霊でえ、ノードは私たちの抽象具現のファンタジー小説から解妖したんだよ」
独り言のつもりが、エルシエさんに聞こえたらしい。どちらもやはり精霊。もう驚きが少なくなってきたている自分自身に、少し驚いていたけれど、そんなことよりも、これから始まることへの興味が勝る。

「うわっ」

僕だけの驚きの声が、その時響いた。ノードが中央部に立った瞬間、ズモモと擬音をつけることが相応しいように、灰色の体が膨らみ塔全体を覆っていく。

「心配ないわよ。ノードは質量物質じゃないからすり抜けるわ」

ラミアさんの声が、ノードに飲み込まれていく足元と同時に聞こえた。

「う、あ……れ？」

眼前から迫るノードの体が、僕らを飲み込んだ。ラミアさんの言う通りに何かが触れたという感触はなく、そよ風が吹いた程度の感覚だけが残り、視界が灰色に染まった。

「キツシユ様、この中はね、ノードの精神領域なんだよ」

隣で相変わらず裾を掴んだり、手を取ってきたりするシオリが教えてくれる。でも、分からない。

「この体はねえ、ノードの体内で、私たちライブラリアンの解妖の時の、万が一に備えて、塔の破損を防ぐ役割があるの」

エルシエさんの解説も、イマイチ理解出来ない。

「ノード、とは、どんな妖精なんですか？」

「ノードは、ファンタジー小説の中で精霊として主人公たちを敵の攻撃から防ぐ盾になっていたのよ。それを踏まえて、今は解妖の際に暴走する精霊がいるから、あたしらの身の保全に役立てているわけ」

なるほど。つまりノード自身は物質化しているわけではなく、その小説内でも精霊として具現化している盾。だからあの存在感のなさや巨体に似合わずの静けさがあるわけか。それにしても違和感がある。モノクロの世界に包まれて、時代を遡っているようなあり得ない感覚がある。

「頑張つて、慣れようね」

慣れないといけないらしい。というよりエルシエさん、あなたは どうして僕の考えていることが分かるのでしょうか？ やはりあなたこそ妖精では？

「さあ、始めるわよ。エルシエ」

「は、いい。じゃあ、シオリとキツシユ君は、そこで見ててね」

「あいあい」

「分かりました」

中央部に行く二人を、シオリが当たり前のように手を繋いでくるから、そのまま繋いで、見つめる。

「カッコ良いんだよつ。ライブリアンって」

「そうなの？　と言うか、何が始まるの？」

解妖と言うことは理解した。その儀式の形態を知りたい所だけれど、どうやら見ているということだけらしい。固唾を呑むわけでもなく、とりあえず、見るだけは目を向けた。

「あたしさ、あんまい予感しないわけよね、これって」

「じゃあ、大丈夫だねえ。ラミアちゃんのお、女の勘は、真逆だもんね」

「あんたの乙女の勘に言われたくないわ」

「うう。私の勘はあ、すごく当たるんだからあ」

「最初だけでしょ。どうせその後はしょーもない結果にしかならないじゃん」

「最初から結果が分かるよりも良いもん」

僕の前の前で、ラミアさんとエルシェさんが言い争いをしています。見ていると言われているので、見ていますが、良いのでしょうか？　そう思った。

「じゃあ、あんたの勘とやらを尽情享受いしましょうか？」

「ん〜とねえ、可愛いお花が咲き乱れる？」

意見を求められて語尾を疑問系とは、さすがはエルシェさん。主張するようではないです。

「あれは、何をしてるのかな？」

口は軽い口論。親しい仲だからこそ言い合う所で別段傷つかない応報合戦。それでも、疑問はある。中央部に置かれた本を取り巻くように、ラミアさんとエルシェさんがコート？　の中から取り出したタクトのような棒で空間に指揮者のように何かをしている。指揮者に見えないこともない服装だけれど、音楽は始まらない。

「解妖の紋章を書いているんだよ、キツシュ様」

「紋章？」

シオリの解説に、視線をシオリに下ろす。

「うんっ。本から妖精を呼び出すための呪文だよ」

呪文を描いているわけか。ただ適当に棒を振ってるわけじゃないんだ。

「そっ、なんだ。あんまり実感、ないんだね」

読書のしすぎかもしれない。呪文を唱えて紋章を描くとかは、ファンタジー系小説にはよくある王道パターン。でも、僕の目の前でそれを行っているらしい二人は、お互いを皮肉り合う世間話をしている。何と言うか、とてもじゃないけれど信じられない。毎年開催されている本、メディアのキャラクターを装う、コスプレイヤーのフェスティバルの練習風景のようにしか見えない。まあ実際に見たことはないんだけど。

「そっち出来た？」

「うん。準備おっけーだよ」

二人が棒を振り終えたのか、本を挟んで対角に立つ。心なしか、さっきまでの表情とは別人。服装に相応する凜としたものになったように見える。

「始まるよ、キツシユ様」

「う、うん」

にっこりとあどけない笑みを見せるシオりに、僕は固唾を呑んでいた。空気が変わった気がして。

「神栄なる言の葉に紡がれし、大いなる物語に住まうる御霊よ」

ラミアさんがタクトで本を指す。ラミアさんらしからぬ凜とした表情に、ドキツとする。

「与えられし眠りより目覚め、我がライブリアンの永久不変の語りべと模し」

エルシェさんが同じようにタクトで本を指す。ゆっくりとした喋りでも、別人のように言葉がはつきりするエルシェさんに驚かされる。

《その大いなる世界を、語継ぐ者とせし、今こそ、解き放たれよ》

二人が声を揃えてタクトを同時に天井へと掲げる。

「え………？」

タクトの先 示された天井を追った瞬間、異様なものが視界に映りこむ。

天井を照らし出していた炎が風もないのに揺れ、影を大きく動かし、渦を巻くように炎が激しく燃え出していた。

「ちよつ、あれ、危ないんじゃない………」

思わずそう言っていた。何が起きているのかは分からない。でも、炎が何かに燃え移ったのか、天井が炎に覆われた。

「大丈夫だよ。あれが解妖の灯火だから」

シオリが僕に言う。

「灯火つて………」

どう見ても火災。灯火には見えない。

「ほらっ、キツシユ様っ」

シオリが天井を指差す。それを僕も辿る。

「な、なに、あれ………？」

その瞬間、視界が固定され、目と口が開いた。

天井で燃えていた炎が、ゆっくりと竜巻のように燃え盛りながら渦を巻き、降りてくる。それを見て、鳥肌が全身を駆け巡った。

「ラミアさんっ、エルシエさんっ、危ないですよっ！」

気づいた時には、そう叫んでいた。でも、僕の叫びにラミアさんはおかしそうに、エルシエさんは何故か楽しそうな笑みで僕を見返すだけで、タクトを翳したまま、その炎が降りてくるのを待つように視線を天井へと向けた。

炎がスウッと降りてきて、その渦の大きさがはっきりと分かった時には既に遅かった。

「ラミアさんっ！ エルシエさんっ！」

渦巻く炎に、床に置かれた本ごと、二人が飲み込まれた。何か消火できるものはないか。慌てて探そうとしたけれど、シオリが手を握ったまま離してくれなくて、動けない。

「シオリっ、あ、あれっ」

こんな小さな子のどこにそんなちからがあるんだよっ、と言いたくなるくらいに手を解くことが出来なかった。

「大丈夫だよっ。あの炎は聖炎せいえん解妖かいようの灯火とうかって言うの。焼けたりしないよ。あれが本の妖精に息吹を吹き込むんだよ」

そうは言うけれど、どこからどう見ても、燃え盛る炎。

「エルシエッ」

「うんっ」

その時だった。ラミアさんとエルシエさんの声が炎の中から聞こえた。

《解き放て、壮大なストーリーをっ》

「うわ　っ」

そう聞こえた瞬間、炎が空間を埋め尽くすように僕らの方へ吹き荒れた。焼かれる。そう強く思った瞬間、僕は何も出来ず、シオリの小さな手を握り締め、眩しさに目を閉じるしか出来なかった。

明日からが仕事なのに、僕は死んだ。炎に焼かれて。焼死なんて嫌だなんて思っていたのに、ああ、僕は死んだんだ。もう熱さも何も感じない。死んでしまったんだと、力が抜けた。

もっと読みたい本があった。もっとやりたい仕事があった。まだ部屋やまの片付けもほとんど終わってない。この町の散策もしたかった。田舎の両親を差し置いて先に旅立ってしまったことを詫びたい。来月に出る好きな作家の新刊本も予約したのに。

そんな色々な後悔が脳裏を過ぎった。走馬灯は出てこないけれど。

「キツシユ様？　どうかしたの？　終わってたよ？」

ああ、終わってたんだ。僕の人生。シオリ、君も一緒にいてきちゃったんだね。ごめんね、僕があの時手を離して逃がしていれば、こんなことにならなかつたのに。

「んっ？　キツシユ様。キツシユ様ってばあ」

ああ、大丈夫だよ。シオリのことは、僕が責任を持って天の国へ連れて行くから。それがせめてもの僕に出来ることだろうからさ。

「ん〜？ ラミアさまあ、エルシェさまあ、キツシユ様が変わったあ」

ああ、死んじゃったからね。生きてる時に比べたら体がないわけだから変にもなるさ。精神世界に来てしまったからには、僕も体を亡くした精神だけでいるんだ。それは生きてる時にはない、異質なものなんだろうね。もうどこにだって飛べそうだよ。体だってほら、軽いんだ。　軽い？

「あ、あれ？　重い……？」

何となく飛べるかも。そう思ったのに、力を入れた感覚に腕が上がる。

「キツシユ？　大丈夫？　つか、何、その手？」

「握手かな？　はい」

「いや、あんたね……」

腕から伝わる温もり。すべすべして細いのに、温かい。気持ちが良いかった。これが天使の温もりなんだろうか。

「わたしもおっ」

反対の手にも温もりが宿った。そのまま体が引張られる。

ああ、このまま僕は天国へ連れて行かれるのかな。シオリ、君もきつと同じようになっているんだよね？

「気絶、しちゃったのかなあ？」

「寝てんでしょ。いつまで寝てんのよっ」

「いたっ」

体が持ち上げられた瞬間、脳天を劈く痛みに目を閉じていたのだと、眩しい世界に気づいた。

「あ、あれ……？」

眩しい。そう思ったはずなんだけれど、薄暗かった。

「起きた？」

目の前に僕の手をとったまましゃがんでくるエルシェさんの顔。その横には同じように屈むシオリの顔と角が見えた。

「あれ？　ここは？」

「ここはって、解妖の塔よ。キツシュ、あんた頭でも打った？」

頭上から聞こえる声に顔を上げる。ラミアさんが呆れた面持ちで見下ろしていた。

「あれ？ 皆さん、ご無事、だつたんですか？」

記憶が段々と甦ってくる。炎が室内全体を焼いたと思ったのに、壁はともかく、ラミアさんもエルシエさんも、シオリも全くの無傷で僕を見ている。そう言う僕自身も何の外傷もなかった。

「無事って何が？」

「ですから、さっきの炎で、皆……」

「炎？ ……ああ、うん。平気だよ。あれはね、熱くない炎なんだよ。」

「だから言ったよ、キツシュ様」

まだ多少混乱しているらしい僕の頭に振る言葉には、その日現実を現実と認識するには、いささか時間を要するようで、すぐには理解することができなかった。

「……って、そ、それは、何ですか？」

それは置いておいて、気がついたことに問いを投げる。

「ん？ これ？ これの妖精」

ラミアさんの片手の中には、春の植物図鑑。燃えたはずなのに、やっぱり燃えた後なんかない、今までの本の姿。そして僕が気づいた違和感と言うか、超常的な異質物。植物のようなんだけど、何かうねうね気味の悪い根だか、茎だかが動いている。緑色の蛸のよう。

「可愛いよね」

エルシエさんが平気でそれを撫でる。しかも愛おしそうな笑顔で。いや、僕にはどう見ても気色悪い物にしか見えないんですけど。

「まあ可愛くはないけど、害はないわよ」

「えー、可愛いよお。ねえ、シオリ？」

「うん。仲間、仲間」

シオリなりの逃げなのか、感想は言わずに妖精が増えたことに笑みを見せる。

「それ、植物、ですよ、ね？」

「そうよ。名前はないけど」

いえ、それ以前に動いているのが変だと思わないのでしょうか、ラミアさん。

「ご飯食べる植物もいるし、動く植物もいるから、同じだよ？」

エルシエさんがまた心を見透かしたように言う。

「いえ、それらとは次元が違いすぎませんか？」

食虫植物とか、熱帯雨林地域に生息する、根を張っては枯らし、また根を張っては枯らすことで、歩くように移動する植物の話は聞いたことがある。でも、それは時間を掛けてそう見えるものであり、今、僕の目の前　ラミアさんの片腕の中で蠢く植物とはまるで違う。植物の妖精なら動かないことが基本じゃないだろうか、図書館で見かけた花の妖精らしいものは、揺れこそしていたけれど、ここまで動いてはなかった。

「妖精だし？」

「妖精だもんね」

「妖精、ようせー」

ああ、理解していたさ。いましたとも。ただ、受け入れたくなかっただけ。ここでは僕の常識が非常識なんだって。

「どうだった？」

「え？」

ラミアさんが、まだ名前のないウネウネなる植物の妖精を持ちながら聞いてくる。

「解妖だよ。基本的には、こうやって妖精を呼び起こすんだよ」

「ああ、そうですね。……とりあえず、驚きました」

死んだと思うくらいの炎だったのに、火傷一つも負っていない。最後の方は何が起きたのか、全く分からなかった。それは単純な驚き。それが精々の結果だ。

「ま、最初はそんな感じか」

「うん。館長もびっくりして尻餅ついちゃったもんね」

そうなんだ。館長はどうやら僕と同じ人種らしい。

「さて、ノード。もう良いわよ」

ノオー、と僕らを包み込んでいたノードが者と大きさに戻る。こうして見ると、ノードは大きいんだけど、今まで僕らを飲み込んでいた姿を思い返すと、そうでもないような気がしてしまふ。

「終わり？ 今日はまだ終わり？」

シオリがラミアさんから図鑑を大事そうに受け取り、胸に抱える。「そうね。後は搬入本の整理と、他のライブラリーへの転用本の箱詰めもしないといけないし」

「私も、不明図書と廃棄図書の搬入手続き書を書かないといけないから、また今度だね」

どうやら、これで今日は終わりらしい。何か数時間なんだけれど、実に衝撃的なものばかりを目の当たりにしてきて、酷く精神的に疲労しているかもしれない。

「キツシユ。あんたも今日は上がって良いわよ。明日は八時出ね。着任式があるから」

「あ、はい」

やっと終わりが。心の中で安堵する自分を、ラミアさんとエルシエさんが笑った。

「な、なんですか？」

「いゝや、別に」

「頑張れそうだなあって、思っただけだよ」

眼鏡を上げるラミアさんといつも雰囲気に戻るエルシエさんの言うことが、いまいち分からなかった。

「がんばろね、キツシユ様」

「うん、まあ……はい」

ここで僕に何が出来るのか。指示された仕事のうち、出来ることはそう多いものじゃない。今までと異なる司書と言う職業に、僕は素直に返答することが出来なかった。

「それじゃあ、お疲れ様でした」

「ボランティアありがとね〜」

「明日から一緒にがんばろうね〜」

ラムリアさんの一言は、トドメの一刺しとして胸を貫いた。結構色々させられたけれど、研修のようなものだった。当然規定外時間労働で賃金はない。この後家に戻って片づけをしなければならぬ事を考えると、気が重くなった。それでもエルシェさんの笑顔に、多少はいい経験が学べたと思う材料にはなったかもしれない。

「さあて、今日も残業かねえ」

「うう〜、寝不足はお肌の大敵だよお〜」

精霊指定図書庫に戻り、帰り支度を終えて、部屋を出ようとするとなんな声が聞こえた。中央の大木の木の伸びた枝の書棚の本の冊数は皆目検討がつかない。そしてカウンターらしき場所に積み上げられた本。これも軽く数百はある。これら全てが妖精の宿る本だなんて、数時間前の僕なら信じられないだろうけれど、今はそれもどこか納得してしまう僕がいる。

「ほら、あんたたちっ！ ちゃっちゃと働きなさいよっ」

人の声ではない、鳥の声でも獣の声でもない、響くような透き通るような不思議な声が幾重物音色を奏でた。

何となく、後ろ髪を引かれる。自分ひとりだけ先に帰るのは、今までそうなかった。でも、やることもある以上、以前慌ただしく働いているラムリアさんとエルシェさん、それに妖精たちに一礼して部屋を出る。

「うあ、そうだった……」

部屋を出た瞬間、空気は閑散ではない静けさ。それこそ静寂と言う不快にならない静けさが、かすかな違和感を生む。あまりに騒々しい中から出たからだろうけれど。

そして、今度こそ物質的な圧迫感に息が詰まる。部屋を出た瞬間の身を擦らなければ通れない通路。この通路を通るだけでも、また一苦勞を強いられてしまった。

「お疲れ様です」

「はい、お疲れ様でした。大変でしたでしょう？」

受付を通る際、挨拶をしたら第一声がそうだった。

「ええ、まあ。すごい経験をしましたけどね」

受付の人はどうやら知っているらしい。 当然か。同じ職場

なんだし。

「キツシュさん、ただ、このことは口外禁止事項ですので、くれぐれも内密によろしくお願いします」

「え？」

予想外の言葉。

「どういうこと、ですか？」

「キツシュさんは、これまで書籍精霊をご存知でしたか？」

書籍精霊。ラミアさんやエルシェさんとはまた異なる呼び方。恐らくは同一対象を称するのだろうけれど、確かにこれは存じなかった。

「そう言うことです。司書であれど精霊指定図書の在するライブラリー並びに国立ライブラリー以外での書籍精霊については目下調査中であり、ライブラリーを管轄するライブラリアンと私たち司書には、口外不門の義務が課せられています。明日、館長より通達があると思いますが、片隅に入れて置いてください。キツシュさんは素質を見越されたライブラリアンの見習い、と言うことですから特にですよ」

「は、はあ……」

それつきり、受付の女性は明日からお待ちしていると、僕を送り出す。口外は禁止と言うことの疑問と、妙に納得する事象に、夕暮れの町並みを味わうこともなく、帰路に就いた。

これが、解妖……？（後書き）

閲覧ありがとうございます。

前書きに書いたので、特に書くことはありません。

とりあえず、次回更新予定作は本作同様、更新が滞っていた「波の間」間に「たごえ」です。

予定日は今の所6日を予定しております。

帰路の途中で（前書き）

少し遅くなりましたが更新です。

帰路の途中で

いつの間にか、ライブラリーの外は夕陽に茜色に染まっていた。

「やっぱり、変だ」

それが外に出てからの初めての言葉だった。振り返ってみるライブラリー。木々に囲まれた温かく、優しい雰囲気のあるライブラリー。それは内装も同じで職場としては問題ない。でも、振り返ってみるライブラリーには、解妖の塔の中で見たとてつもなく高い天井の建物なんて、どこにも見えない。

「どこにあんなものがあったんだ？」

確かにライブラリーは所蔵本に合わせて巨大なものがある。けれどこのウォルトライブラリーは地方町の普通の大きさ。果たして僕が目の当たりにしたものは現実なのか、それとも精霊指定図書館の中のように夢でも見ていたのか、未だに解決するには難しい状況だけが残された。

「とりあえず、帰ろう」

それはそうとして、今日は挨拶だけのはずだったから、部屋の片づけがまだほとんど終わっていないことを思い出す。

「こんにちは」

「こんにちは」

のどかな夕焼けの中で、ファンタジックでメルヘンな家が建て並ぶ通り。スクール帰りの子供たちも都会とは違って自然というのか、純粹そうに一人一人が楽しそうに笑いあいながらすれ違い、僕にそう自然と挨拶をしてくる。

「おかえり」

たったその一言だけのすれ違い。けれど、僕にとってそれは新鮮だった。ハイスクールくらいだろうか。そんなお年頃の少女たちがすれ違う人に挨拶をする。見ず知らずの僕に対して。そんなこと、今まで体験したことが無く、子供たちの温かさが残っているところが、

たったそれだけのことなのに嬉しく感じてしまった。

「こんにちは」

「あら？ はい、こんにちは」

それから僕は、夕陽の庭で花に水をやっている女性など、この時間帯でものかな町の人たちに挨拶を試してみた。それは最初はドキドキして、緊張して、ちよつと不安で声が思わず高鳴ってたんじゃないかって思うくらいだったけど、そんな緊張なんてすぐに払拭された。

「この辺りではあまり見ませんよね？」

「はい。今日ミンティスのラクリアから越してきたんです」

色鮮やかな花も温かなオレンジの光に包まれ、水しぶきに薄い虹がかかる中、少し僕の足はそのお宅の女性の女性の問いかけに止まった。

「ラクリアからですか？ お仕事何かか？」

「ええ。明日からウォルトライブラリーの方で」

そこで女性の表情に多少の変化が訪れる。

「じゃあ、司書さん何かですか？」

「ええ。あ、挨拶が遅れました。ウォルトライブラリー司書補佐につきます、アサルト・キツシュと言います」

「そうでしたか。あ、私はエレナ・フォードです。この近くにあるフォレストマンションの管理人をしています」

エレナさんの言葉に、え？ と思った。

「そ、そうなんですか？」

思わず聞き返してしまう。そのマンションの名前は、今日僕が引っ越してきたマンションの名前だった。少しウェーブのかかったロングヘアースタイルの良さに、管理人のようには見えないけど、この人がそうだったというのは何の偶然か驚いた。僕が驚いているのを不思議そうに見てくるエレナさんに事情を話した。

「あら、そうだったんですね。……そう言えば、先日ご連絡いただきましたね」

言われて思い出した。最近是不動産を介して引越しにおいても大

家さんや管理人さんとのふれあいも少なく、今回は鍵の受け渡し時期の変更について連絡したことがあった。まさかこんな所で会えるとは思っていなかった。

「すみません、ちゃんと挨拶に来たわけじゃなくて……」

「いいえ、そう畏まらないで下さい。ウォルトライブラリーは私もよく利用しているので、これから良くお会いすると思いますから」
菓子折りの一つでも用意して置けばよかったと、何も持っていないかったことにもエレナさんは笑ってくれた。どこにいてもこの町の人はおおらかで優しい。

「あ、そうそう。キツシュさん少し待っていてもらえますか？」

「はい……？」

一通りの挨拶が終わり、そろそろお暇しようと思ったら、エレナさんが自宅へ戻る。玄関先に残される僕は、ただエレナさんが再び戻ってくるのを待つ。することも無くなり、エレナさんが管理人であることを再認識しつつ、周囲の様子を眺める。正直な所安心した。管理人が厳しい人だったりすると、そこまで生活に支障はないとは言え、契約期間中はそこから別の場所へ引っ越すのは金銭的に難しい。紹介されたところである以上、エレナさんのような優しそうな人が管理人であるなら、これからの生活も楽しめそうだと期待が湧いた。

「ごめんなさいね、お待たせして」

エレナさんがそう言うけれど、時間にしてそれほどじゃないと思う。綺麗な家が立ち並んでいて、レンガ作りのウォルトライブラリーにしても、やっぱりこの町は良いと改めて思っていた時だったから。

「お夕飯はまだでしょう？ 良かったらこれ、召し上がってください

い

「良いんですか？」

手渡された蔓で編まれたバッグを開いてみて、忘れていた空腹を思い出した。

「ええ。少し作りすぎちゃいましたから。白身魚のパイ包みは好きですか？」

「はい。こういう料理は母が良く作ってくれたので」

香ばしい香りと、まだ温かさの残るパイ包み。思わず唾を飲んでしまう。僕からは何も用意していないのに、偶然の出会いにこうもおまけがついてくるなんて、かえって申し訳なさすら覚えてしまうが、それでもエレナさんの微笑みに、嬉しさが溢れてこなかった。「これから何か困ったことがありましたら、遠慮なさらずに仰ってくださいね」

「はい、これからお世話になります。あ、いきなりですが、一つ良いですか？」

お暇しようと思って、一つ思い当たった。恐らくはこのバッグの中にあるパイ包みを見て思い出したことだ。それまですっかりと忘れていた。

「この辺りにマートか何かはありますか？」

都会ならスーパーや店はいくらでもある。でも、この辺りではそういう店舗というものを見かけたことがない。

「この町には、マーケットはありませんが、個人店はあちこちにあるんですよ。週末にはウォルトライブラーでマルシェが開かれますから、明後日には行かれると良いですよ。夕方には色々とおまけと値引きもしてくれますから、楽しいと思いますよ」

そう言いながらエレナさんが僕の背後を手で示す。

「あ、なるほど。こういう看板が出ているんですね」

エレナさんの家の向かいにある家。てっきり家だと思っていた。少しばかり果物が沢山置いてある家だと思ったら、フルーツ屋だと軒先に吊るされている鉄看板に果物が象られていた。

「マンシヨンの近くにもパン、お肉、ジャム、お野菜のお店がありますし、お魚でしたら駅の近くに港があるので、その市場で美味しいお魚が並んでますよ」

「そうなんですか。今度行ってみます」

ライブラリーの休日は確か日曜。と言うよりもこの町も日曜は安息日らしい。どの町でも同じ習慣だとは思う。でも、恐らくラクリアに比べると、休日はマルシェ意外での買い物は多分見込めないだろう。なるべく早めに飲料水だけでも貯蓄しておいたほうが良さそうだ。

「それでしたら、今度のお休みの日にでも、町をご案内しましょうか？」

唐突な提案に、思わず間を生む。

「あ、ですが、せっかくの休日をお邪魔してしまうのでは？」

散策自体は嫌いじゃない。本を探すついでにふらふらと計画も立てずに町を歩くこともしばしばだ。案内してもらえるのは確かにこの町を知るにはいい機会だろうけれど、さすがにエレナさんの休日を奪ってしまうことは、さすがに抵抗を覚える。

「良いんですよ。私のお買い物についてと言うことになりますし」
それでも笑顔のエレナさん。

「そうですか？ お一人の方が宜しいですか？」

ここまで言うってくれる管理人さんは、どこを探してもそうはいないだろう。せっかくの申し出でもあるのだから、これは断るほうが失礼と言うものだろう。

「では、良いですか？」

「ええ。では、日曜の午前にもお伺いしますね」

「はい、色々と本当にありがとうございます」

「いいえ。キツシュさんにもこの町を好きになってもらいたい、私のわがままですから」

そう、楽しみに微笑むエレナさんに、僕は多少なりとも見とれたかもしれない。こういう家庭的な人は好きなタイプだ。善意で誘ってくれている以上は、素直に楽しみにさせてもらうことにして、今日はお邪魔することにした。

一言二言の挨拶を済ませて、エレナさんに笑顔で見送られ、再び町を歩く。今の僕にはどこと無く不相応なバッグを持っているけれど、

ど、その中から香るかすかな香りは、ここへ来て良かったと、この町での仕事を幹旋してくれたパルリアートには感謝するばかりな帰り道だった。

エレナさんに教わった店を探して、二、三日分の食材と飲料水、ワインを買って家に戻る。両手に感じる重みは、ラクリアにいた頃よりも、どうしてか心地良く、茜色に染まる町を歩くだけなのに、気持ちは軽やかだった。

「明日から頑張らないと」

嫌いな仕事じゃないから、どこの派遣先でも仕事は楽しかった。けれど、その帰り道だけは、疲労感と道行く人たちの速さにおいていかれているような気がしてしまい、家に帰ることはあまり楽しみには思えなかった。今朝家を出てから何も変わらない室内に入るとどこから湧いてくるのか、さらに疲れが増して、ベッドに倒れこむことも幾度があった。それが今はどうだろうか。エレナさんに出会っていないければ、今のようない気持ちは無いのかもしれないけれど、それでもこの町は人を愛し、人も町を愛している雰囲気は漂っている。きつと僕はそんな温かさに酔いしれ始めているのかもしれない。そう思える帰り道だった。

「……まずは、片付けだな」

それでも、やっぱり部屋は昼と変わらないわけで、少しばかりお嫁さんと言つ存在がいてくれたのなら……。なんて、収納箱の積み上げられた室内と、エレナさんのパイ包みの香りに、独身の寂しさを思い返させられた。

翌朝、目覚ましより早く目が冷めた。静かな室内。大して変わらない部屋の様子。折りたたまれた収納箱と未だに片付けの終わらない箱。電子時計が今この瞬間すらも全てを過去へと変えていく。

「よし。張り切って行こう」

エレナさんがパイ包みを入れてくれた籠は、帰りに返そうと、昨日の帰り道に見つけた小さなお菓子屋でちょっとしたお菓子の詰め

合わせを入れて仕事に持っていく。少しばかり服装には不相応だが、それも仕方が無い。ラミアさんやエルシェさんにかかわれるんだろつ、と思いはすが、仕事は仕事。プライベートとは別として、身なりを備え付けの全身鏡でチェックして玄関を出る。眩しい朝陽と爽やかな空気が全身を突き抜けるように香った。今日も良い天気だ。張り切って仕事に行こう。そんなやる気に満ちた瞬間だった。

「ふああああ〜あ〜、きつつ〜……」

鍵を掛けて、エレベーターの方へ歩いていこうとして、体の向きを変えた。

「ほおらあ、ラミアちゃん。ゆっくり行ってたらあ、遅刻しちゃうよお〜」

歩き出そうとして隣室のドアが開いた。昨日は時間がなくて挨拶が出来なかったから、ちよつど良いと思った時、大きなあくびとのんびりとした声が僕のみだり耳から入って右耳から朝日の向こうへ飛んでいった。

「別に良いじゃないのよ……。どうせ朝礼で、キッシュの挨拶があるだけでしょお」

さも面倒臭いと表情が言っている女性　ラミアさんだった。

「だめだよお〜。ラミアちゃんの直属の部下だよお〜？　上司が怠けてちゃ、示しがつかないんだよお〜？」

「そんなもん、どうとでもなるわよ……重役出勤ってやつ〜？」

「だあめえ〜。それはあ、もつとダメな人のことを言うのお〜」

ラミアさんの隣で早く行くよ、と相変わらずのんびりした口調で話す女性　エルシェさんまでそこにいた。

示しがつかないというか、もう見えています。そう口にしてしまっそうだったか、それよりも先にラミアさんが僕を見た。

「……………」

まだ眠たげな表情のラミアさん。昨日の凜とした大人の女性と言っ、僕の印象とはかなりかけ離れた表情で、黙って目を合わせてくる。

「ほおらあゝ、ラミアちゃん。行こうよあゝ……あ」

エレベーターの方を向いていたエルシェさんが、なかなか動き出そうとしないラミアさんの腕を引きながら振り返り、彼女ともまた目があった。

「あ、お、おはようございます」

さすがに二人とも僕を、「え？ 何でいるの？」的に見る。もちろん僕だって驚きに、思わず不思議と気まずいようなそうじやないような微妙な空気に、苦笑が浮かび上がってしまう。見なかった方が良かったのかもしれないと思い、駆られて。

「は？」

ラミアさんの第一声。それは無表情にて明確な疑問と、恐らくはまだ寝ぼけ眼によるものの睨みのような表情。

「キツシュ君、どうしたの？」

僕の挨拶は二人に流される。

「何であんたがここにいるのよ？」

僕としては、自分の恥ずかしい格好を見られたラミアさんが慌て取り繕う、何てことを一瞬でも考えたけれど、実際は不機嫌そうに僕を見るだけ。そう言う顔をされても……。

「ここ、僕の部屋なんですけど……」

としか言いようがないわけで。相変わらずこちらを睨むラミアさんは、自分の失態を僕に見られたのがよほど嫌だったのか、反応は淡泊だった。

「あ、そ。そなんだ」

今しがた、今日は頑張るぞっ！なんて気持ちを高めたのに、その一言でドンドン僕の気合は萎んでいく。

「え〜〜っ！ そうなのおっ!？」

打って変わって響く、エルシェさんの驚き。それすらものんびりとしていて、本当に驚いているのかすら、よく分からない。

「は、はい。昨日越してきたんですけど」

「へ〜〜〜。実はねえ、私たちもここに住んでいるんだよあ」

エルシェさんがニコニコと笑う。それは今二人を見ているので分かってる。

「まあ、ここはあたしの部屋。んでもって、こっちがエルシェね」
僕の部屋の隣はラミアさんで、その隣がエルシェさんらしい。今時玄関前に表札を出している人がいないから、まさかの出来事を目の当たりにした。

「そうなんだあ〜」

驚いているのは僕だけらしく、すぐに、まるでこれが冗談ではないことを確かめる時、人は頬を摘む。それとはまた別だが、どうしてもそうしているような感覚になってしまっ指が飛んできた。

「えへへ〜、ご近所さんだねえ、キツシュ君」

「え、ええ。そうみたいですな……」

さて、僕はどう反応するべきなのだろうか。昨日といい、今といい、ふにふにと頬を人差し指で押されるこのエルシェさんの行動。何を意味する為のものなのか、理解に昨日同様に苦しむ。

「菓子折りの一つくらい挨拶に来ないわけ？」

そして、一方からは笑みの無い朝からテンションを強制的に下げられてしまうような、痛い一突きを投げかけてくるラミアさん。

「ラミアちゃん。キツシュ君だってえ、引越しのお片づけがあるんだよ〜？ また今度だもんねえ〜？」

エルシェさんがフオーしてくれる。それは嬉しいと思える。事実だからだ。そのついでに頬を突くことを止めてくれるともっと嬉しいのですが……とはさすがに言えず、何となく突かれる所が温かくて、止める気にもなれなかった。しかも、そのフオーも嬉しいことはそうだけれど、少しばかり改めて用意して挨拶に来るんだよね？ と遠まわしに催促をされているような気すらするから、今日の帰りにでもまたお菓子か何かを買っておかないといけないのかもしれない。

「でさ、キツシュ。それ何？」

そう言いながら、僕の頬を突くエルシェさんは無視して、エレナ

さんの籠を覗き込む。すると、ラミアさんの表情が不機嫌から氷が解けていくように、僕がライブラリーで見たエルシェさんの凜々しい表情を見せ、さらにそれを越えて、どこか嬉しげに僕を見上げてくる。

「なるほどねえ。あんだ、気が利くじゃない」

「え？ あっ」

そう思った時には、僕の手から籠がラミアさんに奪われた後だった。

「あ~~~~っ！」

そして、僕の驚きよりすら飲み込んでしまうエルシェさんの声。

僕の手はラミアさんに伸びていたのに、その声に思わず手を引っ込めてしまう。

「これっ！ ルーン・タズサ・ドルチエのお菓子い〜」

店名まではよく覚えていないけど、マンションの近く似合ったお菓子屋で購入した菓子折り。エルシェさんの表情が輝く。それは別に二人のために買ったものではない。でも、二人の明るい表情に、今更それはエレナさんへのものなのですが……とは言えないのが僕だった。

「タズサのそこは高いのよねえ。あたしらもたまにしか買えないし」

「ちょっとしたご褒美だもんねえ〜」

ラミアさんに、あんだやるじゃん。と、横腹を小突かれた。そのつもりは皆無だったんだ僕には、苦笑でごまかすしかなかった。

「よしっ。朝から良いもんもらったし、今日も元気出していくわよっ」

中の菓子折りの箱を取り出すと、籠はいらないと返される。箱を持ったまま、ラミアさんは歩いていく。中身を失った籠だけが軽さを伴って僕の手の中で揺れた。

「…………ごめんね、キツシユ君」

「え？」

でも、先に行くラミアさんはさておき、エルシェさんは僕の頬を突く指を離すと、少しだけ申し訳なさを感じさせつつも、愛らしさを忘れてはいない、ちろつと舌を出して、そう言った。

「あのお菓子、エレナさんに、だよね？」

ラミアさんに聞こえないように、小声でそう言われて、何故？

と表情に出してしまったようで、エルシェさんが囁いた。

「その蔓籠、エレナさんのだよね？ あれ、お返しだったんじゃないのかな？」

なんと言う観察力と推理力。エレナさんから預かったままのこの籠なんて、正直どこにでもあるものだ。

「だからね、私たちには、あれ一つでいいからね」

そう言っただけでエルシェさんが再び笑う。どうやら僕が越してきたことと、エレナさんに会ったことで、状況は分かっていたらしく、ついでに自分たちへの引越しの挨拶すらも、二つ分を用意しなくても良いと先に言われてしまう。僕はそう言われて二人にも挨拶をしないといけないんだと思いついたばかりだった。

「エレナさんには、半分くらい私が出すから、ラミアちゃんのあれは、許してあげてね？」

「あ、いえ。良いですよ。今日か明日にでもお二人にもお渡しするつもりだったので」

二人分が一人分で済むのであれば、それに越したことは無い。金銭面でもありがたい申し出だった。

「そっか。じゃあ、これからよろしくね、キツシュ君」

エルシェさんが手を出して笑う。僕はその手を握り返す。この人のおっとりとしているのに、人に限らない観察力は僕を軽く越えている。先のことまで考えている上に、愛らしいその笑顔に、敵うわけがなかった。

「エルシェ、キツシュ。さっさと行くわよ」

「はい。行こう、キツシュ君」

「はい」

エレベーター前で待つラミアさんに、僕は続いた。思わぬ朝の出来事だったけれど、結果的には良いこととして収まった。仕事前に落ちかけたテンションは再び上り調子に戻ってきた。

帰路の途中で（後書き）

次に更新するのは、波の間に向うたごえを
更新日は12月2日に変更にします。です。

ウォルトライブラリー所長（前書き）

思っていたより早く更新できました。

今回は新キャラ登場させました。

それほど長くありませんが、次回はちょっと回想入れます。

ウォルトライブラリー所長

通勤路はいたって普通だった。僕らより吸う穂先を歩くラミアさんと、僕の隣を歩くエルシエさん。女生徒並んで歩くことはそれほど多い方じゃないから、マンションを出手すくは、エルシエさんが一番後ろを歩いていた。

「優しいね、キツシュ君」

「あ、いえ、別にそういうつもりじゃ……」

どうやら気づかれていたみたいだった。僕が歩幅を小さくして、歩く速度を落としたことを。

「キツシュ君、ラクリアから来たんだよね？」

「はい。そうですけど？」

ラミアさんは基本的にそれほど会話に入ってこない。むしろさつき僕の手から奪った菓子詰めを見ながら、どれから食べようかと悩んでいるようだ。でも、一方でエルシエさんは良く声をかけてくる。僕から話しかけることはなく、楽といえば楽。けれど、何となく距離が近いせいか、あまりエルシエさんを見て話すことが出来ないというより、恥ずかしい気持ちが大きかった。

「どんな街だったの？ 私、ラクリアには行ったことないの」

大抵エルシエさんから聞かれることは、はい、いいえ、で答えられるものじゃなかった。何かしら補足説明をしなければ伝わらないことばかり。おかげで話しやすい気分にもなる。

「そうですね、こことは違って、見た感じから立体映像や機械が溢れてました。生活に苦労することのない街と言った感じでしようか」
ラクリアは本当に便利だった。インフラの整備は完璧。数分後とに移動手段になる乗り物が何かしらやってくる。どれも無人操作による、完全制御システムのおかげ。買い物ですら自宅から、近所の店にネットから注文すれば配達されてくる。遠出するにも、レールを使えば快適に移動できるし、スタンダーレールの運行本数も多い

し、遠方ならレールラインの高速鉄道もどこへでも繋がっている。あまりに遠いときにはエアシップで空の旅だが、それはあまり使うことはなかった。

「へえ、便利だねえ」

「はい。仕事へ行くにもこれほど歩くことはありませんでしたね」
何より仕事の時の移動手段が今のところでは一番の違いだろう。

ラクリアに居る時はマンションからすぐ近くにスタンダーレールの駅があったし、場所によっては動く（ノーウォーク）歩道^{ロード}が完備されていたから、歩くと言う動作はマンションから外に出る時と、勤務先へ着いた時くらいだった。しかし、この街に来てからは、基本が徒歩だ。スタンダーレール、レールラインの駅は逆方向。無人輸送のバスなどもほとんど見かけない。

「すつごく田舎だね」

エルシエさんが不意にそう呟きながら朝日に照らされ、朝露の煌めく花たちが戯れる軒先を見ていた。

「そうですね。でも、悪くないですよ」

そう。不思議と嫌だとか、不便とか強く思うことがない。むしろ気に入ってしまった。何かをするにしろ、どこかへいくにしろ、自分の足で歩かなければならない。買い物も自動で配達も出来ないよ。うだし、大型のモールなどもない。だから、この時間だって、空が真つ青だとか、太陽が眩しい、各家庭の庭先の輝かしさなどによく目が移ろう。今までそんなことを思いながら仕事へ行くことなんてなかった。いつもの時間に起床し、支度をし、仕事へ赴き、その日の仕事をいて、帰路に就く。大して周りの背景なんて気にしなかった。

「ドキドキするよね？」

そんな僕に、エルシエさんが優しい笑みでそう聞いてきた。

「ドキドキ、ですか？」

「うん、ドキドキ。今日は何か良いことがありそう、とか、わくわくしそうなお日様日和とか、歩くだけでも楽しくなるよね？」

エルシエさんの言うドキドキと、僕なりに感じているドキドキは、今は恐らく少し違うと思う。今日から仕事に就く僕にとっては何も式のごく緊張からドキドキはしている。それでも、エルシエさんの言うドキドキも何となく意味は理解できた。

「清らかな空。頬を愛おしく撫でる風。ドレスを纏う朝露の花。その中を歩く私たちは、まるで舞踏会へ誘われる蝶のように軽やかに足が進んでいく。きっと今日は素敵な一日になる。そんな感じがしてくるよね、この町は」

不意にエルシエさんがいつものような微笑ましさのある笑みではなく、優しさにあふれた、母性に満ちた　　言わば、女神のような微笑を携え、僕を見上げた。思わぬ表現とその笑顔に、僕の心は朝だと言うのに、妙に跳ね上がりそうになった。いや、跳ね上がったかもしれない。賛同か否かを求める問いかけに、僕はエルシエさんのその笑みに魅了されてしまい、肯くだけで良いはずだというのに、それすらも奪われてしまう。感覚の略奪。それは虜という言葉に片付けられてしまうほどに、僕の目には輝いて見えた。

「え、えっと……」

「エル・デ・バートの第四刊行書籍、《サルマンタ通りのブレンディ》より、第一章十七ページより抜粋」

返答に困ってしまった僕に、正面を歩くラミアさんが少々呆れ声でそう言った。

「え？」

振り返ることなく紡がれたその言葉に、僕はラミアさんを見た。

「清らかな空。頬を愛おしく撫でる風。ドレスを纏う朝露の花。その中を歩く君は、まるで舞踏会へ誘われる蝶のような軽やかな足取りで、僕の目の前を美しい靴音と香りを残して通り過ぎる。その背中を追う僕は思ってしまった。その美しい後姿を永遠に眺められるのであれば、この熱いブレンドコーヒーが氷になってしまっても、僕は気づくことなく口に運んでしまおうのだろう」

ラミアさんがやはり振り返ることなく、続ける。一体何のことな

のか、僕には分からなかった。

「えっと、ラミア、さん？」

その言葉は、明らかに日常的会話に用いるような言葉ではない。小説や物語に使う文字としての表現方法だろう。今時、そんな恥ずかしい言葉を惜しげもなく言葉にする人は、そうはいない。いるとしたら、よほどの自己陶醉型の人間か、空気を読めない人だろう。

「エルシエ、あんた、やっぱ腹黒いわあ」

そこで初めてラミアさんが振り返る。視線は僕ではなく、エルシエさんを向いているが。

「もお、そんなことないもん。私が感じたままに言ったただけだよお……ちよつとだけ、似てたかもしれないけどお」

エルシエさんが頬を膨らませてそう言い返す。

「キツシユ」

「は、はい？」

「エルシエが常日頃そんなこと思うと思ったら大間違いよ。この子はね、腹黒いんだから」

ほら、とラミアさんがバッグを漁りながら一冊の本を僕に投げた。いきなり投げるから慌てて手に取ると、文庫本だった。

「サルマンタ通りのブレンディ？ あ、これは？」

さっきラミアさんが言っていた本らしい。僕の知らない作家だった。

「あ~~~~~っ！」

と、ラミアさんが僕に読んでみなさいとでも言うように僕へ顎を上げてみせる。よく意味が分からないままページを開こうとした時、エルシエさんの驚いているようなんだけど、口調がのんびりした声が響く。

「十七ページよ」

「十七ページ？」

言われた通りにページを開いてみる。

「ダメダメダメえ。キツシユ君、ダメ」

でも、開こうとした時、僕よりも小さな手が、本を開かせないと伸びてくる。温かく柔らかい手のひらが僕の手を包むように押さえ込む。それでも力は僕の方が強かった。いや、捲るのが早かった。

「あつ……」

その瞬間、飛び込んできた文字の世界。文頭から読んでいないため、内容の把握は難しい。でも、言われた通りに十七ページに視線を落とすと、引っかかる一文が見えた。

「清らかな空。頬を愛おしく撫でる風……って、これ」

そこにある文章は、ラミアさんが話したものと全くの同文。エルシエさんが最初に僕に見せた笑顔とともに語りかけた言葉は、ほとんど同じ文章だった。

「そゆこと。良かったわねえ、エルシエ。キツシュがその小説読んでなくて。読まれてたらとんだ恥晒してたわけだし？」

悪戯つ子な笑顔でエルシエさんを見るラミアさん。

「あつ」

むう〜、と恥ずかしいのだろう。僕が開いていた小説を奪い去ると、そのまま自分のカバンに押し込んでしまった。

「これで分かったでしょ、キツシュ。エルシエはミーハーなわけ。見た目と雰囲気だつて演出よ、演出」

そういわれて改めてエルシエさんに視線を向けると、エルシエさんは子供のような膨れ顔でラミアさんの悪戯な笑みを睨んでいた。

「……なるほど。そう言うことですか」

思わず笑いが出そうになった。

「あ〜、キツシュ君、笑ったあ〜」

「笑ってないですよ」

エルシエさんの人柄が自然ではなく、影響されたものを反映している。だから、さっきの表情もその一環だったのだろう。そして、感情豊かにラミアさんに反応する姿が、恐らく本当のエルシエさん。

「笑ったもん〜、今だつて笑ってるよあ〜」

「笑ってないですって」

そんな風に見てくるエルシエさんに、おかしさではなく、愛らしさでも言うのか、少しだけその見栄っ張りと言うか、素直な姿に表情が緩んだかもしれない。でも、自分でも認識する事実は、エルシエさんがたとえ雰囲気繕っていても、それがあまりに自然に見えてしまうくらいに似合ってしまった。それが演出であるうと、僕は確かに魅了された。だからこそ、僕にしてみればどちらの表情もエルシエさん自身に見えた。

「まあ、キツシュ君、笑いすぎだよ」

「だから笑ってないですよ」

そう良いながら、きつと僕は笑っていたのだろう。着任の挨拶の緊張なんて、どこかへ吹き飛んでいたのだから。

「ま、大丈夫でしょ、これなら」

そしてそんな僕らのやり取りを見ていたラミアさんが、そう呟いて、再び先頭を歩き出した。

「まあ、キツシュ君の緊張を解く為だからって、人をダシにしないでよお」

そして今まで隣を歩いていたエルシエさんが、ラミアさんに詰め寄るように僕より一歩前に出た。

「良いじゃない、別に。良いダシが出たわけなんだし」

ああ、やっぱりそうだったんだ。どうやら僕は二人から見ても、緊張しているように見えたらしい。それを解くためにラミアさんがエルシエさんを利用した。そしてエルシエさんもその意味を知っているながら協力した。だから、二人の言い合いには、喧嘩にあるような感情がないんだ。やっと理解した。ジョンケールからラミアさんとエルシエさんは昔から知り合いだと聞いていたから、親友の成せる心使い、みたいなものかもしれない。わざわざ僕のためにちよつとしたプライドと言うのかポリシーと言うのかをわざわざ犠牲にしてまでそこまでする必要はないだろうとは思ったが、僕の前を歩きなから言い合いをしている姿を見ると、素敵な女性に見えてしまった。それこそ、あの台詞のように。

そんなやり取りがあつた後、僕らの前に森が姿を見せる。いや、長い木の散歩道がウォルトライブラリーへと続いている。

「清々しいよね」

石畳になつている通りを、低いヒールの靴音を響かせて先を行くラミアさんはいつしかバッグから取り出した本を読みながら歩いている。そんな後姿を眺めながら、僕はエルシェさんと共に燦燦と木漏れ日が降り注ぐ中をあるく。

「そうですね。ラクリアにはこのように自然の中にあるライブラリーはありませんでしたから、気持ちが良いですね」

少し視線を上によれば、木の葉のトンネルが続き、そこから朝陽がゆらゆらと僕らにまだら模様を浮かべさせる。気温も高くないこの時期には、深呼吸する心地良さを存分に味わえた。

「王立のライブラリーはもつと綺麗なんだよ」

エルシェさんがニッコリという。

「そうですねですか？ あ、そういうはお二人は王立ライブラリーからここへ来たんですね？」

ジョンケールが言っていたことを思い出す。

「そうだよ。私たち、四年前にここへ転属になつたの。あ、でも、飛ばされたんじゃないよ？ 要請があつただけなんだよ」

そこは特に気にはしないです、僕は。一応派遣の司書ですから、似たような境遇なので。普通はそういうことはあまりない。司書は資格を取得すれば、大概募集をかけているライブラリーやスクールなどで働くことが出来る。その中で派遣としているのは少ない方だ。

「王立ライブラリーも司書官の派遣などをしているんですか？」

公立や私立のライブラリーとはまるで異なる存在の王立ライブラリー。正直なところ、僕は行ったことがない。何しろ、ミンティス州から州を八も跨がなければならぬほどに遠い首都にある。ここ、アバラン州からは十二も州が離れている。途方もない距離だ。映像では見たことがあつても、なかなか行く機会のないライブラリーには、一度で良いから行って見てみたい気持ちはあつた。

「うん、どうかな？ 私たちは、神霊享受指定図書だから、他の部署とは独立してるの」

「そうなんですか？」

精霊指定図書を総括するのが神霊享受指定図書という部署。ルルエルド司書官に深く関係しているらしいけれど、その存在は、ここへ来て聞いただけ。だからエルシェさんの言葉を信じるしか、確かめる方法はない。

「うん。元々ライブラリアンは人数が少ないの。だから人員不足の精霊指定図書から派遣の要請があるの」

「じゃあ、ウォルトライブラリーも人手不足だったんですか？」

ラミアさんとエルシェさんしか見てはいない。そして二人は王立ライブラリーから派遣されてきた。となると、元々ウォルトライブラリーには他にライブラリアンと言う人はいなかったのだろうか？

「うん。ウォルトライブラリーは、王立ライブラリーからの要請で精霊指定図書を新設したの。それで、私たちがその第一陣としてここへ来たんだよ。この町は今でも人の手と自然の共存で成り立っているから、精霊指定図書には最適な環境だから選ばれたみたい」
へえ、そうなんだ。と納得した。他に二人のようなライブラリアンの姿は見ていなかったから、そう言うことかとやっと理解した。
あ、だから室内への入り口に詰められたままの梱包箱が山積みになっていたのかもしれない。

「四年も経つのに、なかなか書庫の整理が終わらないってのはどうよ？ って感じでしょ？」

ラミアさんが入り口前に来て本を閉じて振り返った。

「仕方が無いよ。アバラン州全土から初版第一冊が届くんだもん」。私たち二人じゃ、全然手が足りないよお」

「あー。確かに。出入り口まで溢れてましたよね。通るのに苦労しましたよ」

四年経ってもまだまだ作業は途中。でも、四年の間にあの室内の遙か天井までアレほどの本が納められていた。それはそれで凄いこ

とだと思っ。

むいっ。

「むう、それは私たちの作業効率が悪いつて言ってるのかなあ？」

と、エルシエさんが頬を膨らませて僕を見る。あわせて人差し指で頬を押してきて。今まではふにふにと軽く突く程度だったのに、これは押し付けるように頬を押してきて、少しだけ痛かった。どうやら機嫌を損ねさせてしまったらしい。そう言うつもりではなかったんだけど。

「いえ、そうではなくて、新設から四年で、アレほど本が集まるのが凄いなって思っただけですよ」

むいっ、むいっ。

「ほんとかなあ？」

疑われてしまった。内頬が指に押され歯に当たって、ちよつと痛い。

「ほんとですよ」

ん？ と疑って僕を見るエルシエさんに代わって、ラミアさんがはいはい、とそれを止めさせた。急に頬を突く指がなくなると、ちよつと物足りなさのようなものを感じてしまった辺り、僕は突かれるのがやはり嫌じゃないのかもしれない、なんて解放された頬に思ったりした。

「電子書籍が一般的になったって言っても、文庫は出るし、ハードカバーも雑誌も何でもまだまだ出版されてるのよ。それこそこの国だけでも一日で数万冊は軽い。そしてその書物の全ての一冊目には妖精が宿る。それが毎日ライブラリーに配送されてみなさい。幾らあたしらだって猫の手も借りたくなるわよ」

「妖精さんの手は借りてるけどね」

冗談のような口調でも、それが事実だと僕はその世界を見てしまった。まだ信じ切れていないものがあるけれど、精霊指定図書館の様子は、未だに幻夢に思えてしまうけれど、今日からそこで働く

言うのであれば、また僕の中にあるその疑問もきつと解消されると思う。先の分からない仕事。これまでやってきたような、書庫の整理、傷本の修復などとは違う新しい仕事に不安と高揚が入り混じって、僕は少しだけ落ち着きが無いかもしれない。

「まあ、慣れよ慣れ。それよりも気になるのはあれよね」
ラミアさんが並木道を抜けてライブラリー前に来て呟く。

「ん〜、大丈夫だよ、きつと。だって何も連絡来てないよあ？」

エルシエさんはラミアさんの言うことにすぐに反応してそう言うけれど、僕には思い当たりものが無かった。

「あの、何が気になるんですか？」

「どうせ後で知ることよ」

「んふふ〜、そうだね〜」

なんだかはぐらかされた。首を傾げる僕に、ラミアさんはライブラリーへ通用門を潜り、エルシエさんは相変わらず僕の頬を突いて笑っただけだった。

「じゃあ、あなたは一応着任式があるから、人事部の方に行きなさいよ」

「また後で会おうね〜」

「はい」

ライブラリー内に入ると、二人はそのまま精霊指定図書館の方へ向かい、僕はそれを見送り、集合場所に指定された人事部のあるライブラリーの事務所へ出向いた。

「おはようございます。今日から働くことになるアサルト・キツシユです」

まだ出勤するには少しばかり早かったのか、人では少なく、様々な部署が総括してある大広の事務所内には数人がいるだけだった。

「おはようございます。私は人事部のマーシユ・ラインコットです
誰が担当者かと見ていると、一人の女性職員がやってきて、名刺を頂戴する。

「パルリアートの方からはこちらで職務内容の伝達があるといわれ

たと思いますので、どうぞこちらへ」

「はい」

すでに派遣契約書などは記入して契約はした。あとは主な仕事内容についての説明などを受けるだけ。

そして通された部屋は会議室。それでも小さな会議室で印象的なのは、開放的な作りで、窓が多く、そこからウォルトライブラリーの周囲に茂る賑やかな緑の光が差し込んでいくくらいだった。

「この後九時より着任式としてウォルトライブラリー所長のエルフィン・クラナドより挨拶があります。その後は派遣先である精霊指定図書館の総括担当司書官のフェステイアリア・ラミア氏より職務に関する規定等を研修として勉強して頂きます」

「分かりました」

と言うよりも、マーシユさんの口調と言うか、言い方に一瞬疑問が浮かんだ。マーシユさんは今、このライブラリーの所長を呼び捨てにしたのに、ラミアさんには氏をつけた。それ以上に驚いたこともあったり。

(ラミアさんの名前、初めて聞いたかも……)

エルシエさんとは昨日挨拶をしたときに互いに自己紹介をしたけれど、ラミアさんは僕の挨拶を軽く流すだけで仕事をいきなりさせてきた。だから、今初めてラミアさんの本名を知った。

「また、契約期間は本日より一年間。契約満了前月には、審査を通し、希望退職、雇用継続、契約解除など措置を得ていただきます。雇用に関してましてはパルリアート社との提携による保険形態を継続することによりアサルト・キッシュさんへの保障も当日を持って開始されます」

そんな事務的なことは、派遣として働く度にどこでだってまず最初に確認を取らされる。それはつまり、僕が派遣社員である以上、社員との扱いが違うと言うことを自覚することを認識させる。正直なことを言えば、社員ではないのだから首を切られる時に文句を言うなど、保障があるのだからそれで良いだろう？　と言うことだ。

「分かりました。こちらこそよろしく願います」

「では、もうじき所長が来られますので、それまでこちらにてお待ち下さい」

マーシユさんはそれだけを言うと僕に一礼して外へ出て行く。残された僕はかばんをテーブルに置き、一息つく。とても静かだ。窓の外はどこまでも朝陽に輝く緑色が目に優しい。少しだけ開かれていた窓から吹き込む朝風も爽やかで、深呼吸をすると体内が透明になりそうなくらいに空気がきれいだった。人工的に放散される正常な空気ではなく、自然が作り出す清浄な空気は、気持ちを落ち着かせてくれる。

「やっぱりラミアさんたちは王立ライブラリーからだから、なんだろうな……」

ふと先ほどのマーシユさんの言葉が思い浮かぶ。所長を名乗る人物よりもラミアさんに対する方が礼儀を慎むと言うのか、同じ職場にいる人間に対して、距離を置いているという見方も出来る。まるで触れ物だ。目上に対する敬意かもしれないけれど、どうも距離を感じる方に僕の認識は移ってしまう。

コンコン。

時刻は午前八時五十五分を過ぎた頃。ドアをノックする音に、意味無く腰を下ろしていた椅子から立ち上がる。

「失礼しますね」

「は、はい」

カチャ、と開かれたドアの向こう。少しばかり意外な人が姿を見せた。

「初めまして、アサルト君」

そう第一声を掛ける人は、女性だった。しかも、僕はその人を知っていた。

「え、エルさんっ?」

そこにいたのは、マーシユさんのようなキャリアウーマン風ではなく、長い髪を一つ結いに下ろし、小さな眼鏡が似合う、エルシエ

さんとは少し違う大人の女性に優しい笑顔を浮かべているエルさん。僕が前に司書試験の為に勉強していたラクリアのライブラリーで司書をしていた人だ。

「ああ、やっぱりキツシユ君だったのね」

凜とした服装などではなく、どちらかと言うとラフと言うのか、ゆつたりとした優雅と言うか優しさの溢れた服装で、僕の記憶の中にあるエルさんそのままの姿だった。

「あの、エルさんがどうしてここに？」

僕が司書の資格試験に向けて勉強していた近所のライブラリー。そこで司書として働いていたエルさんは、よく僕の勉強を助けてくれた。先輩として色々と助言や現場を通しての本の扱い方や歴史、図書館資料の管理、保管、提供方法、レファレンス、システム運用など様々な現場にいなければ文書だけでは学べないことにも協力してくれた、いわば恩人のような人だ。思いがけない再開に、落ち着いていた僕の心は、驚きに強く脈打った。

「どうして、といわれると、こういうことよ？ って言いたくなるのよね」

エルさんが僕に一枚のカードを差し出してきて、それを受け取った。それは名刺。マーシユさんから頂いた名刺と同じ作り。

「え……？」

だが、僕はそれに更なる驚きを見てしまった。

「所長、なんですか……？」

「ええ。三日前に着任したばかりなんだけどね」

ふふ、とどこかおかしそうに驚く僕に笑むエルさん。

「え？ ええ？ ど、どういうこと、ですか？ というか、向こうのライブラリーはどうしたんですか？」

その名刺には、ウォルトライブラリー所長に名を連ねる証があった。

「ん、どうということって言われると、私も一応公務員ではあるから、昇進ってことになるわね。無効のライブラリーからの昇進人事

ってことで、ここへ移ることになったの。まさかそこにキツシュ君が派遣されてくるなんて、私、思ってたわ」

それは僕もです。あるときから司書の資格を取って三年ほど。その間もエルさんは代わらずに地元のライブラリーで働いていた。

「でも良かったわね。派遣としてでもこうして夢にたどりつけたんだもの」

「は、はい。その節は本当にお世話になりました」

感謝しても足りないくらいに面倒を見てもらったことは、僕には大きい。

「良いのよ。私も自分が改めてこの仕事に就いて学ぶべきことを再認識できたんだもの。お互いに良い思い出になったってことで、今は喜びましょう?」

「はいっ。あの、それで、何でなんですけれど……」

僕はてつきり社長は男かと思っていた。昨日のラミアさんとエルシエさんの話からそうだと思っていたから、その突発的な事態に驚きが消えない。

「え? あ、ああ、ごめんなさいね。着任式の任命をしないといけないんだったわね。つい思い出に浸りなくなっちゃったの」

そう思っていただけるのは非常に光栄であり、僕も嬉しいけれど、まさかエルさんが所長だったなんてびっくりだ。

「いえ、僕の方こそ、またエルさん……エルフィン所長に再会できるなんて思ってもみませんでしたから」

つい、昔のまままで親しく呼んでしまったけれど、今日から僕の上司。はじめはつけないといけない。しっかりと切り替えないと、なんて思っていたらエルフィン所長がおかしそうに笑った。

「相変わらずね、キツシュ君」

「え?」

その笑顔は、僕の知るエルさんだった。

「確かに仕事上は上司と部下になるわ。でも、まだ仕事をしているわけじゃないし、ここには私たちしかいない。だったら、もう少し

くらいあの頃の仲の良い私たちでも良いと私は思うわよ？　と言うよりも、分かつてはいるけど、私にはキツシユ君は可愛い弟、みたいに思えちゃって、何だかあまりお仕事って感じが無いのよね」

ああ、良かった。エルさんはエルさんなんだ。本を扱う以上、厳しい所長がどこも多い。それはそれだけ本に対する情熱が熱いことなんだとは分かっている。でも、この人は違うんだ。情熱はきつと誰よりも強い。だって僕にあれほど親身に教えてくれた人だ。でも、ほんわかとしたその態度には、これから毎日が楽しくなると、確証は無くても自信は出てくる。

「はい、ありがとございます」

「ふふ。じゃあ、時間も時間だし、はじめましょう」

時計の針は時間を過ぎていた。

「失礼します」

そして、まるでタイミングを見計らっていたように、ドアが開いて、ラミアさんが姿を見せた。昨日の解妖の時に纏っていたあの綺麗な礼服姿だった。今朝の態度とは全然違って、ラミアさんはやはり凜としていた。

「ごめんなさいね。少し遅くなっちゃって」

「いいえ、所長。お気にならないで下さい」

ラミアさんとふと、目があつた。どことなく睨まれているような気がしたのは何故だろうか？

「では、これよりアサルト・キツシユ君へウォルトライブラリーでの就労任命を行います」

そんなことを気にすることなく、エルフィン所長が一枚の色紙を広げ読み上げた。それはウォルトライブラリーで勤務する以上、利用するお客様の為に尽力を尽くし、本への慈しみを元に、本の楽しさ、面白さを広められるように働いて下さいということだった。

「では、アサルト・キツシユ君は精霊指定図書館にてこれから一年間頑張ってもらいます」

「はい、これからよろしく願います」

深く一礼して、顔を上げるとエルフィン所長が僕に微笑んでいて、ラミアさんは凜としているけれど、どこかつまらなそうに僕を見ているような気がしてしまいうくらいに表情がなかった。

「ではラミアさん、キツシュ君のことをよろしくお願いします」「分かりました。しっかりと指導し、立派な職務につかせてみせます」

期待していますね、とエルフィン所長は微笑み、ラミアさんは僕を静かに見ているだけだった。

「キツシュ君」

「あ、はい？」

任命が終わり、話もこれで終わりだろうと思った時、エルフィン所長が僕を呼んだ。

「勤務が終わったら私のところへ来てもらえるかしら？」

「はあ、それは良いですけど、何かありましたか？」

「いいえ、大したことじゃないのよ。詳しくはその時にお話するから、よろしくね」

ん？ と疑問が残ったけれど、そう言われるとそれに従うしかなく、ラミアさんが僕をまっていた。

「ではキツシュ君、これから仕事内容について説明するので私についてきてください」

「あ、はい。それでは失礼します」

「はい。頑張つてね」

ラミアさんに君付けされて思わず、むず痒さが沸いたけれど、そんな反応を見るわけでもなく、ラミアさんはエルフィン所長に一礼すると先に会議室を後にした。僕も一礼をして笑顔で見送られて先に会議室を後にすることになった。

部屋を出ると、やはりラミアさんは僕よりも数歩先を歩き、僕はその凜とした背中を追うだけ。特に会話は無かった。何か話した方が良いのかな？ なんて思っていたのに、先にラミアさんが振り返った。

「あんだ、所長と知り合いだったわけ？」

何だろう？ 朝の態度も少し冷たいと言うかそっけない感じだったけれど、今は今でさっきよりも何だか厳しいと言うか視線が少し痛いと思う。

「え、ええ。司書資格の勉強で利用していた地元のライブラリーで

……」

「何年前？」

「えっと、三年ほど前ですけど。それが何か？」

「どついう風に出逢って、どんなことをしたの？ 詳しく聞かせな

さい」

「え？」

いきなり何だろう？

「良いから全部。上司命令」

ええ？ そんなことを聞いてどうするんだろうか、ラミアさん。

と言うか、何か変だ。やけにエルさんにムキになっているような……。あ、もしかして、ラミアさん、エルフィン所長のことを知りたいのかな？ さっきの様子を見ていても、やっぱりエルさんがラミアさんに所長としての態度よりも、目上の人を見るような感じに見えた。それがラミアさんは嫌だったんじゃないだろうか？ 上司から遠慮されるように接せられるのは、ラミアさんをまだ昨日しか見てないけど、それでも何となくラミアさんは自己顕示が強いというか、仕事熱心だ。だからこそ上司であるエルさんには、部下としてみてもらいたいのかもしれない。だからこそ、何かしらの糸口になるかもしれないことを聞いておきたい、のかもしれない。

そう思うと、それで関係が改善できるのであれば悪くないかもしれない。エルさんは基本的に温和で女性らしい人だから、きっと仲良くなれるだろうし。

「そうですね。少し長くなりますよ？」

「構わないわ。書庫の整理はエルシェが指揮してるから」

それは大丈夫なのだろうか？ エルシェさんののんびりさからす

ると、あの室内にいる妖精たちに目が届かないような気がするし、本を整理しながら手に取った本をつい、と読みふけりそんな感じがするんですが。

「こつちに来なさい。いいところがあるわ」

もつとつくに始業の時刻は越えているのに、ラミアさんは精霊指定図書館の方ではなく、ガラス扉に手をかけ、やっぱり何も言わなのまま僕に背中を見せ、ウォルトライブラリーの一般立ち入り禁止の中庭の方へ歩いていき、僕はついていけただけだった。

「エルシエ様、エルシエ様、これ、このご本、どこ？ どこ仕舞うの？」

シオリがトコトコと髪の間から角を覗かせてエルシエの元に寄る。

「えーとお、その本はねえ……」

「エルシエ様、こいつあそろそろ解妖の時期でさあ。いつごろ変えやすい？」

ばさばさと羽音と風を振りまきながらジョンケールが上空から降りてきた。本を嘴で挟みながらエルシエに本を差し出す。

「ふえ？ えつとお、それはあ〜」

「エルシエ様さまあ〜。3124から3145までの本が図書管理システム部から貸し出し教本の申請入ってますですよ〜？」

「あれえ？ そうだったっけ〜？ カヅラ、じゃあね、それはあ〜

……」

「エ〜ル〜シエ〜さま〜、ここの本〜は〜、どおし〜まあすう〜かあ〜？」

その頃、仕事が始まると同時に、精霊指定図書館は妖精たちが室内と飛び交い、エルシエは次々と寄ってくる妖精に指示を出そうとするが、のんびりとしているせいで、指示を出す前に次の要請が指示を仰ぎに来て追いついていない。

「えつとお〜、え〜とお〜……うう〜、何が何だか分からなくなっ

てきたよお〜」

《エルシエ様、この本はどうしますかあ？》

次々とエルシエの周りには妖精が寄ってきて、仕事が早速行き詰
つてくる。

「エルシエ様っ」

「あう〜、着任式終わったのに、ラミアちゃんも、キツシユ君もな
んで戻ってこないのお〜？」

妖精たちに詰め寄られ、エルシエはもお〜と少々憤慨したように
声を上げていた。

ウォルトライブラリー所長（後書き）

閲覧ありがとうございました。

次回更新予定作は「波の間に間につたごえを」です。

更新予定日は、今月下旬から来月上旬になります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1908e/>

ライブラリアン ~ 図書館の森 ~

2010年10月21日21時33分発行